

# 漢代鬼神の世界

林 巳 奈 夫

	まへがき	二三頁
一	沂南畫像石墓の鬼神の世界	三五頁
(1)	前室北壁	三五頁
(2)	沂南畫像石の鬼神配列の原則	三八頁
(3)	墓門	三一頁
(4)	前室北壁楣石	三三頁
(5)	前室、中室過梁	三三頁
(6)	中室八角檠天柱	三七頁
二	青銅器物などに表はされた鬼神の世界	三三頁
(1)	ポストン美術館藏の西王母東王公鏡	三四頁
(2)	フリア美術館藏の山紋青銅尊	三四頁
(3)	四山四龍紋鏡	三四頁
三	畫像石その他に部分的に表はされた鬼神の世界	三四頁
(1)	安邱畫像石墓、後室西間西壁	三六頁
(2)	ド・ヤング美術館藏山紋塗金青銅尊	三六頁
(3)	孝堂山石祠破風内壁	三六頁
四	個別の神話的光景を主題とした畫	三五頁
(1)	黃帝の許に昇天	三五頁
(2)	北斗君に召された人間	三五頁
(3)	雷公、風伯	三五頁
(4)	三苗の追放	三五頁
(5)	海神	三五頁
(6)	山神(?)	三六頁
(7)	昇天する神神	三六頁
(8)	その他の神話	三五頁
(9)	裝飾モチーフになつた神話的光景	二八頁
五	祥瑞	二八頁
(1)	武氏祠の破風内壁	二八頁
(2)	徐州十里鋪の畫像石	二六頁
(3)	徐州、睢寧等の畫像石	二六頁
(4)	武氏祠の屋根石	二六頁
小	結	二六頁

まへがき

漢時代、神神や死者の魂、自然界の精靈の類は人間の姿をもつて、或ひは想像上の動物の形をとつて、畫像石、墳墓の壁畫、

器物の裝飾の中で意外に大きな部分を占めてゐる。これらは當時の言葉で鬼神と總稱されてゐた。<sup>(1)</sup>これらについては闕に雲氣仙靈奇禽怪獸を畫くのは四方の人人にさういふものを明示するためである、といふことが漢代にいはれ、<sup>(2)</sup>この類は邪惡な影響を逐ひはらひ、死者の安泰を確保するためのものではないか、といふやうなことは現代の研究者の誰しもが考へてみることであるが、<sup>(3)</sup>従來、鬼神のテーマ全般がどういふものであるのか、學問の研究對象として本格的に取扱はれたことがない。<sup>(4)</sup>四神とか龍や鳳の類、西王母、日月など若干のものについては今までに關心が拂はれてゐるのではあるが。

鬼神の畫像のうちには墓室や墳墓の附屬建造物に飾られるものが多いが、その飾られた場所そのものだけから考へても、これら鬼神が單に建物の壁面を埋め、美しく飾るといふ美に對する要求のみによつてそこに畫かれたものと考へることができない。さういつた場所が呈供されてゐるについては、當然第一義的にはそれよりもつと切實な、利害にかかはりのある關心事があつてのことと考へねばならない。然らば表はされた畫像の何たるかを知り、その畫かれた意圖を探ることによつて、鬼神の實在と働きを信じ、その圖像的表現に眞劍な期待をよせた漢代の一般の人人の精神生活の一部面を明かにすることができるとは思ふ。

このやうな研究の資料として鬼神の圖像を利用するためには、その表はされた建造物中での位置、他の鬼神の圖像との關係を顧慮することが必要である。それによつて研究上の鍵鑰が與へられることが多いからである。かういふわけでここには鬼神の集つて構成する群像、それもなるべく大規模な、畫像石に見出される類を主としてとり上げることにした。以下に記すのは、多數の關係資料の中から右に記したやうな目的に合致するものを選び出し、その性質によつて類別し、その畫かれた内容についてあらましの解説を行ひ、併せてそれがそこに表はされた意圖について推測を加へた、いはば基本資料の提示、といった性質のものである。圖は筆者のトレースした線描圖の形で示してある。もとなつた寫眞乃至拓本は原物が損傷して不鮮明になつた所があり、馴れない人にはなかなか判讀が難かしい部分があるためである。いはば古文書を活字に組んで引いたやうなものである。オリジナルの風格は損はれてゐるが、何が描かれてゐるかを知るためには有用と信ずる。

なほ鬼神の圖像の研究方法として、個々の種類別にとり上げ、文獻をも参照しながらその名稱、性格などを明かにしてゆく方法がある。その研究結果を畫入りの圖鑑のやうな形にまとめ上げることも研究者のために有益に違ひない。以下に記す論考の網にかからなかつた類については、折をみてそのやうな方法でまとめめる意向であるが、それはまた先のことにならう。

## 一 沂南畫像石墓の鬼神の世界

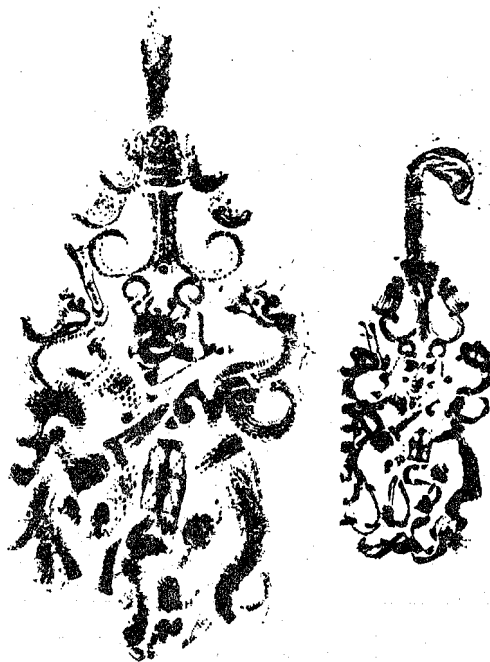
鬼神の類の畫像が大量にまとまって見出される點で、沂南畫像石墓<sup>(5)</sup>は頗る重要である。まづ手始めに研究のいとぐちをここに索めるのが便宜である。

### (1) 前室北壁

圖1(以下、圖何番とあるのは卷末の別刷附圖の番號を示す)は沂南畫像石墓の前室北壁を飾る畫像である。この墓の主要部は前・中・後三室より成り、入口は南であるから、この畫像は墓の入口を入ると正面にあるわけである。この壁には中央に柱を残して左右に中室に至る通路があげられ、これによつて壁面が三分されてゐるが、圖1に示した三つの畫面はこの三分された壁面に當る。一見して明かなごとく、右、即ち東が青龍、左、即ち西が白虎で、これら四神の一員は夫々壁面の對應する方角に表はされてゐるのである。中央部の上には朱雀、下には玄武が見出される。上を南、下を北に見たてた配置である<sup>(6)</sup>。

中央には正面向に立つた獸形の神が表はされ、頭上に弩、左手に手戟、右手と兩足には異つた型式の劍を持ち、足間には盾が置かれる。これは何であらうか。四神は天の四方の星宿の神であるから、これは天の中央の星宿に配された神といふことにならう。『史記』天官書には天の星を中官、東官、南官、西官、北官<sup>(8)</sup>に分けて各々に屬する星座を記してゐるが、中官には、

中官天極星、其一明者、太一常居也



挿圖1 天帝使者帶鉤 右 石家莊市東崗頭  
村漢墓出土、約1/4 左 出土地不明

『正義』に

泰一、天帝之別名也

と、即ち泰一（太一）とは天帝の別の名だ、といふが、この動物形の神は天極の中の明い星、太一、即ち天帝を表はす、と考へられようか。

圖1の中央に見るとき多数の武器を持ち、四神に囲まれた圖像は帶鉤のデザインにも使はれてゐる。挿圖1右はその一例で、石家莊市東崗頭村漢墓の出土品で、報告に<sup>10)</sup>

鑄造して一人物が手に劍と盾を持ち、足に刀と斧を握るものを表はし、四周には四神がある。

と記される。上部、帶鉤の鉤になつた所が朱雀の頭で、下に翼、胴、足がみえる。中央の神の右邊には白虎、左邊には青龍、足の下には玄武が辨別されよう。武器の持ち方に相違があるが、四神に囲まれたこの神が、圖1と同一のものを表はしたものとある。東西南北各官の記述では、その最初に各官を代表する四神の一つに當る星座が記されてゐるところからみて、中央の官の代表は天極星であることが知られる。その中の明い星が太一の常に居る所だといふのである。天極星はいふまでもなく今日の北極星のことではなく、一列に並んだ小熊座のγ、β等々の星座で、その内の一番明るいものといふのは帝星、即ちβ星である<sup>9)</sup>。天極といふ星座名は天の極（棟の材）といふことで、この子熊座の棒狀に並んだ星の形を天の棟に見たてた名稱であるが、いま問題の武器を執つた動物形の神は木材の棟木の神には見たてにくい。天官書の前引の條の

であることは疑ひなからう。挿圖1左も同様な例である。この方は裏面上部に「大吉」と、また革帯にはめるボタンのすぐ上に「天帝使者」の文字がつけられてゐる。「天帝使者」とは文字通り天帝の使者の意と考へられるが、これは勿論この帶鉤の製作者、或ひは持ち主が天帝の使者だといふことは考へ難いから、この帶鉤の表側を飾るデザインが天帝の使者だ、といふことに違ひない。ところでこの挿圖1左の例は科學的發掘品ではないので、偽銘でないことは保證するわけにゆかないが、圖1の沂南の例でこの神の表はされた位置から推論した「天帝」ではないかとの推定と、天帝の點で合致する所から考へると、この銘はやはり全くの空からでつち上げられた偽物とは到底考へられない。この銘に信頼をおくとすると、中央の神像に對するさきの「天帝」とする推定は不正確で、本當は天帝の使者の像だつたといふことになるのである。この多種類の武器を執つた獸形の神像を蚩尤に當てる説があるが、蚩尤が戰爭の神であることをこの種の像が武器を澤山持つことに結びつけただけの思ひつきの説である。<sup>11)</sup>

さて、天帝使者とはどういふ性質の神か。それについては後漢時代に墓中に入れられた呪術的な瓶に記された文があり、參考になる。例へば文章が完全に残つてゐる『奴隸制時代』に引かれる例<sup>12)</sup>をみると、大體これは當時の公文書の型式をもつてゐるのであるが、天帝使者が死者張氏の墓を支配する地下の役人達に命令して丘丞墓伯、地下二千石といった地下の世界を統治する官僚に命じ、張叔敬といふ男が死亡したので諸君の支配する地下の世界に死體を埋めることになるが、迷惑はかけないやうにするので今後とも張氏の遺族に禍ひを及ぼしたりしないやうに、といふ筋になつてゐる。<sup>13)</sup>人間が死亡して死體が埋葬され、地下の世界をけがすことになるのについて、地下の世界を管理する役人共が怒つて遺族に禍ひを及ぼさぬやう、地上の人間の最高支配者である天帝が使者を派遣し、地下の世界の管理者をさとす、といふ趣旨である。

天帝使者はこのやうに、死人の出た家の遺族のために、彼等に禍ひを及ぼしかねない地下の世界の諸侯や縣知事を、天帝の威をかさに抑へにかからうといふのであるから、強力に武装した手強さうな姿に表象されたわけであらう。挿圖1に引いた帶鉤では、自分のために積極的に働いてくれる天帝使者に重點が置かれて、その姿が特に大きく扱はれ、四神はそれが天帝使者

であることを示せば足りるといふことで、周圍に小ぶりに表はされてゐるのであるが、(15)圖1の畫像石では四神と天帝使者の像の大きさは均衡を得てゐる。この圖像は天の四方の星座を代表する四神の像と天帝使者をもつて天空を表はしたものであるが、中央に天帝使者を配したについては、彼が地下の支配者の及ぼしかねない禍殃を遺族のために除いてくれるものである點に期待する所があつたに違ひない。

## (2) 沂南畫像石墓の鬼神配列の原則

前室北壁の畫像を研究することにより、この一群の鬼神の畫像が、その棲むと信ぜられた方位と對應させて墓室中に表はされ、一つの完結した世界を畫いてゐることが明かにされた。類推により、この墓室の他の鬼神圖も、やはり同様な原則によつて畫かれてゐるのではないかと考へられる。果してさうであるか検討してみよう。この畫像石墓では他に前室の東西壁夫々の北寄りと南寄り、前室北壁の上部楯狀の石材、前室および中室の中央の八角柱の八面、その支へる梁の東西兩面、後室の梁の東西兩面に、まとまつて列をなす鬼神の群が表はされてゐる。これらのうち、前室の東西壁、前室と中室の八角柱については畫像の表はされた位置の方位について問題はなからう。南北方向の梁の東西兩面については、各面の畫像が全長にわたつて總て東、乃至西と見てよいか、それとも例へば西面の北寄りに畫かれた畫像は西北方に對應する、といふやうに、南北の別を入れるべきか否かは差當り確定し難い。

畫像の方位に關して問題があるのは、圖3の前室北壁上部、楯石の畫像である。この畫像は兩端を除き、上下二列に鬼神が並んでゐるが、東端が戟と鉤鏤を持つた虎、西端が戟と盾を持つた龍で、二列に並んだ鬼神の列の中央には上下に朱雀と玄武が居る。すると、虎と龍は武器を持つてはゐるが、この畫像は圖1に引いた前室北壁の畫像と同様、左右に白虎と青龍、中央上下に朱雀玄武を表はし、それで四方を代表させてゐるのではないか、と一應考へられる。然し、さうすると白虎が畫像石の實際の方位では東に、青龍が西に配されることになつて不都合である。翻つて考へてみるに、はつきり四神と知られる例で、

	前室北壁楣	前室東西壁	前室過梁	中室八角柱	中室過梁	
双 人 頭 鳥	東乃至 東北			南		×
四 頭 鳥	南乃至 南東				東乃至 東北	△
通 天 冠 人 頭 鳥	西北				西乃至 西北	○
鹿			西乃至 西北	西北		○
一 角 獸		東乃至 東北		西北		△
顯首斑紋偶蹄動物	西乃至 西北		西乃至 西北		西乃至 西南	○△
銜 蛇 獸 頭	東乃至 東南			東北		△
虎 頭 偶 蹄 動 物	南乃至 南東				西乃至 西南	△
一 角 龍			東乃至 東北		東乃至 東南	○
無 角 龍				南	東乃至 東南	△

表 一

朱雀、玄武と組合せられる白虎、青龍が戟などの武器を執つてゐる例は一つもない。さうすると、この畫像の東西は、墓室中における實際の方位に合せて、戟を持った虎のゐる方を東、龍のゐる方を西とみるべきと思はれる。この畫像は鬼神が上下二列になり、上列中央が朱雀、下列中央が玄武であるから、この兩者は南北端である。また兩端を東西端とすると、南北端を下にした方阵形の鬼神の列を、電車のパンタグラフを下すやうに、平たくたたんで表はした、と解釋することができよう。

なほこのやうな東西方向の取り方に問題があると感ずる者もあるかもしれない。上に示す表一において、もし筆者の考へとは反對に、戟を持った虎を白虎に當てて西に、戟を持った龍を青龍に當てて東と解すると、筆者の解釋をとつた場合大體整合的になるべきものが、みな合はなくなる事實は、筆者の解釋を採用すべきであることを示すものである。

表一はさきに舉げた沂南畫像石墓の鬼神群の中から疑問の餘地なく同一の鬼神を表はしたと思はれるものを拾ひ出し、その表はされた方角を表にしたものである。<sup>(16)</sup> ぴたりと合ふものは○、「南乃至南東」と「東乃至東北」といふやうに、東北と東南程度の差のものは△、全く合はないのは×と印した。多數の鬼神の中からここに拾つたごとく確かに同一と判定できる鬼神像は、この墓の畫像石を分擔して刻した職人の流派の違ひに因る表現の差異を考慮に入れても、やはり豫想外に少數である。然しそれで比べてみた限り、○と△が大部分といふことが知られた。さらに試みに口に法螺貝のやうなものを當てて風を吹き出す獸形の風神——極めて例の少ないもので、ここに引く以外には今のところ例が知られない——を取り上げてみると、沂南畫像石墓では前室の壁面で東乃至東南に當る方角に畫かれ、

圖27の徐州の例でも東に當る所にあつて○印で對應する。

かうみると、沂南畫像石でグループをなして表はされる畫像ではその中の畫像の表はされる位置は、それが棲むと信ぜられた方角と大凡——九〇度以内の誤差を見込んだごく大ざっぱな話であるが——對應してゐることが知られた。このやうなことは例へば武梁祠の破風内壁の東王公、西王母像などの例については、限られた形で知られてゐたことではあるが、ここにそれ以外についても同様なことがある事實が明かにされたわけである。

さうはいつても、ここに引いた八角の柱、その上に載る南北方向の梁、前室北壁の楣は、夫々多數の鬼神を表はしてゐるが、さきに見たごとくそれら同志に共通する神像は意外と少いばかりでなく、共通した神像をとり上げてそれと隣接する圖像を比較してみると、相違するものばかりが見出されるのである。即ち、これらの鬼神圖は、例へば大きな曼陀羅のやうな鬼神世界の總圖があつて、それから一部を切り取つて寫した、といった性格のものではない、といふことである。この神は北方に居る神、これは南方に居るもの、といった常識があつて、それに基いて多様な姿をとつた鬼神像が適宜鹽梅されたもの、と見るべきである。『山海經』、海外南經に

海外自西南陬至東南陬者

結匈國在其西南……

南山在其東南……

比翼鳥在其東……

といった記述があり、定つた排列、順序のある基本的な圖があつて記述がなされてゐると考へられるが、畫像石の場合さういつた臺本に據つてゐると思はれない、といふことである。



(3) 墓 門

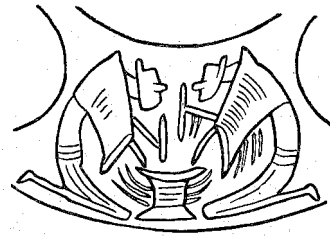
沂南畫像石墓の鬼神の圖像が一群としてどういふ原則で排列されてゐるかの見當をつけた上で、各群の内容につき、もう少し具體的に検討して行かう。圖2は中央に一本の柱を入れた墓の入口の左、中、右に配された南側正面に向ふ圖像である。左と右の下半に、實際の方角に合せて西王母と東王公の像が表はされてゐる。西王母は頭に玉勝をつけ、左右には白を前に、杵をとつて坐る兔が配される。いふまでもなく不死の藥を搗いてゐる所である。郭璞の山海經圖讚に

昆侖月精、水之靈府、惟帝下都、西老之宇、嶮然中峙、號曰天柱(柱)

といふ。即ち昆崙は月の精であり、水の靈府である。また天帝の下都で西老(西王母)の家である。によつきりとそびえ立つてゐて天柱<sup>(18)</sup>と呼ばれる、と。昆崙山が月の精だから月に居る、藥を搗く兔がここに居るのである。

西王母と兔は高い柱のやうなものの上に坐る。郭璞の讚にいふ天柱の形である。この柱は上擴がりになつてゐる。これについては『十洲記』に昆崙山について山の上に三つの角<sup>(19)</sup>があり、廣さは萬里、盆を伏せたやうな形で下が狭く上が廣い、といふのに當らう。三つの柱狀の山の間には虎が居る。東王公の居る山の間は龍と呼應し、白虎と青龍と認めてよからう。西王母と兔の上にも虎がのつてゐる。西王母の姿について「虎の齒をもつ」といはれるが、人間らしい姿に表はされるやうになつた後もそのやうな古い西王母のもつた虎の要素がこのやうな形で残つたものででもあらうか。その上方には胸から腹にかけて鱗のある獸形の神が居るが、これは何者か不明。

右の東王公も玉勝を戴く。ひげがあることで西王母と區別される。兩側には白を前に杵をとつて坐る仙人が表はされてゐる。上腕や腿に長い羽毛がつき、頭に大きな耳のやうなものが突出した姿の人間が仙人であることは、例へば鏡背紋でこのやうな畫像に「仙人六博」とあることによつて確かめられる。<sup>(20)</sup>左側の仙人は頭の後に結ばない髮束がなびいてゐる。この髮——被髮——も仙人に特徴的なものである。<sup>(21)</sup>これらの仙人は西王母の兩脇で不死の藥を搗く兔に對應して、仙人の王僑と赤誦(松)が



挿圖2 王儁と赤誦 東急美術  
館藏漢鏡 約%<sub>4</sub>

藥を搗く所と考へられる。挿圖2は獸帶鏡の圖柄の一部であるが、銘文に「王儁赤誦<sup>23</sup>藥草」といふのに當ると思はれる。かういふ傳説があつたのである。

東王公の上には中央の大きな顔をもつた男に兩手でかかへられた一對の人身蛇尾の神がある。右は籠冠を、左は幘をつけ、男女の區別がかき分けられてゐる。中央の男の肩から左右に規と矩がのぞいてゐる。男女の神は拱手してゐるので彼等が直接持つてゐるわけではないが、これらが伏犧と女媧であることを示すものであることは疑ひない。伏犧と女媧が中央の大男によつてかかへられる圖像は畫像石に他にも例が幾つかあるがこれは何か。大男で直ちに思ひ起されるのは

「巨人」、「大人」である。『詩』大雅、生民に姜嫄が「履帝武敏歆」と、即ち「帝」の大きな足あとをふんで歆びを感じて云々、といふ傳説はよく知られる。その解釋については多くの論議のある所であるが、それはここでは立ち入らぬとして、この「帝」が鄭箋には「大神」、『史記』周本紀には「巨人」、『論衡』吉驗篇には「大人」と記される。この詩は周の始祖の姜嫄が郊媒に祀り、「帝」の子を胎んだといふ話であるが、問題の圖像で人類の始祖である伏犧と女媧を一緒にかかへるこの大男が、大神、大人、巨人、即ち巨大な人間形の神と呼ばれる「帝」であつて、これが同時に伏犧と女媧を結婚させる高媒だと考へることが出来る。何故なら齊の社稷、宋の桑林など各國の社は高媒であることが知られてをり、また社は「帝」の祭祀をする所でもあつて、社に降る神である「帝」が高媒でもあつたことは十分に考へうることだからである。この問題についてはここに詳論する餘裕がないのでまた別の機會にゆづり、この男は高媒乃至「大人」と呼ぶことにしよう。

さてこの高媒乃至「大人」は東王公と同じ方位に表はされてゐるのであるが、畫像石には西王母東王公の夫々の兩側に人身蛇尾の神の侍る例があるので、かういふ配置もあつてよからう。

中央の柱の畫像については確かな説明がつけにくい。下は何か饗饗の類と思はれる。中央は仙人。名ある仙人に違ひないが、誰かはつきとめられない。その上は虎。最上部の足を踏張つて弩の弦を引き、矢をくはへた武人の像も、ただの番兵のやうな



挿圖3 天祿と辟邪 東急美術館藏漢鏡 約原寸

群には圖4—6に多く見られる龍の類が西面南端のものを除いて他に一つも見當らない。圖3と圖4—6とは何か異つた世界を構成すると考へられるが、具體的にどういふ區別があるのかについては後考に俟たねばならない。

(5) 前室、中室過梁

次に圖4の前室過梁の畫像をみてみよう。東面の中央よりやや右寄りに鹿のやうな斑があり、長い尾をもつた動物が居る。耳の間に一本の角があり、角の上部が少しふくらんでゐる。後引圖47上にも出てくるが、これは麟である。麟の形について『春秋公羊傳』哀公一四年傳「麟者仁獸也」の何注に

狀如麇、一角而戴肉

と。即ち、麟の姿は麇(きよん)に似て一本の角があり、角の先に肉がついてゐる、といふのである。この圖で角の上が廣くなつて平らなのは肉のクツンヨシがついてゐるといふ趣旨と大體合つてゐる。圖42、47などの麟は角の上に圓いタンポのやうなものがついた形に表はされてゐる。麟は前引『公羊傳』の續きに「有王者則至、無王者則不至」とあるやうに、通常は地上にゐないものである。いつもはこの圖のやうに鬼神の世界に仲間入りしてゐるものなのである。

東面、左から二番目は朱雀である。西面、中央よりやや右寄りの所には、體に虎のやうな縞をつけた一角の動物がある。これは辟邪と呼ばれたものである。圖30に引いた鏡で「辟邪」の題字の右にゐるのが、虎のやうな體つきに一角を

持つたもので、これと共通するからさうと知られる。この鏡では四葉座をへだててもう一匹の同様な動物と對になつてゐる。挿圖3右の鏡紋では、虎と、虎に一角のついた形の動物が鈕をめぐつて表はされてゐるが、銘に「白虎辟邪居中央」とある。これらが白虎と辟邪であることは疑ひない。なほ挿圖3左の鏡では身體がもつと細長くはあるが、一角の虎のやうな動物が一對表はされてゐるが、この方は銘に「上有天祿在中央」とある。これは天祿のつもりに違ひない。辟邪と天祿を圖像の上で區別するのは必ずしも容易ではなささうである。<sup>(36)</sup>

次に前室過梁と同様な性質の畫面をもつた中室過梁(圖6)をつづいて検討しておかう。この畫像も、中に表はされた鬼神が多様であるにかかはらず、名前を知りうるものは少數に過ぎない。

東面、右から二番目は龍身鳥頭の神。『山海經』、南山經に栢山から漆呉の山に至るまで、その神はみな龍身にして鳥首、とあるが、<sup>(37)</sup>沂南の畫像石の範圍でいつても先に注(16)に指摘した通り龍身鳥首の神にも様様のヴァリエーションがあるので、果してこの南山經のものがこれかどうか、甚だ心もとない。

西面右端に居るのは九尾狐と思はれる。九尾狐は圖12、43他、畫像石や漢鏡の圖柄などに多く現れ、尾が九本といふより九岐の形に表はされるのが通例である。ここでは六乃至七岐に過ぎないが、九尾狐のつもりと思はれる。『山海經』海外東經に青丘國在其北、其狐四足九尾、一曰在朝陽北<sup>(38)</sup>

と、即ち、青丘國はその(朝陽の谷の)北にある。その狐は四足九尾である。一説には朝陽の北にあるといふ、といふのに當らう。

九尾狐から一匹おいて左には二匹の狐のやうな動物が並んだ形に表はされてゐる。ただ足は合計四本しか見えない。これは或ひは『爾雅』釋地に比肩獸といはれるものかとも考へられるが、これは鼠前兎後、鼠後兎前の二種の片破のやうな動物のペアで、<sup>(39)</sup>圖像が左右同種であるのと合はない。『山海經』大荒南經に、

者でなく、力士の姿をとつた鬼神の類ではないかと思はれる。圖5の北面中央に木を根こぎにする力士の姿がある。或ひはこれの一種でもあらうか。圖5では一人だけ畫かれてゐるが、後述のごとく群像の形で表はされたものがあり、ヴァリエーションがありうるからである。

正體不明のものもあるのであるが、これら三本一組の圖像の表はす世界は何か。先に筆者は漢鏡の圖柄の解釋を試みた際、西王母、東王公が地上の世界と天の「帝」などの棲む宇宙との中間に位する世界にあることを指摘した。<sup>29</sup>この圖2の畫像石の左右に西王母、東王公を扱つた世界も同様に解して差支へないと思はれる。東王公の上に位置する高媒乃至「大人」は、地上の古代の文化英雄を結び合せる神で、先に考へたやうに恐らく天から降つたものである。中央の柱の仙人も、勿論人間が昇天の能力を得たものであり、宇宙と地上の中間の世界に屬することは明かだからである。沂南畫像石墓の入口は、神神のうちでも人間に身近な世界に棲む者によつて飾られてゐる、といふわけである。

#### (4) 前室北壁楣石

圖3に引いた沂南畫像石墓前室北壁の楣石の畫像は、さきに(2)節において四方に居ると信ぜられた神神を方陣形に配したものを、電車のパンタグラフを下すやうな具合に平たくたんだものと解釋した。子細にみると實に様様な姿をした奴が居てなかなか興味深い。文獻中に對應するものを探し出すことができるのはまた實に僅かで、朱雀玄武を除くと次に記すときほんの三種類だけである。漢人が豫想以上の、桁外れに數多い鬼神にとり圍まれた世界に暮してゐることが知られる。この畫像の東半分は意外にも名の知られる鬼神は見出せない。西半分をみると、上列右端に近く、籠冠をかぶり、手に斧をもつた、身體のない神がある、『御覽』八八六引の『白澤圖』に

三軍所載精、名曰賓滿、狀如人頭、無身赤目、見人則轉、以其名呼之、即去、

と。即ち、三軍の荷物にすむ精を賓滿といふ。その姿は人の頭の形をなし、體がなく、目が赤い。人を見ると轉がる。その名

前を呼んでやるとどこかに行つてしまふ、と。この賓滿に當らうか。これには斧を持つとは書いてないが。

この賓滿の下に一角獸が居る。これは以前にも記したことがあるが、獬豸と呼ばれた神獸で、曲直を辨別する能力があるとされたものである<sup>30</sup>。酒泉、下河清第一八號漢墓では青銅製のものが角を前にさし向けた、この圖にみると同じポーズで前室前端に頭を外に向けて置かれてゐた<sup>31</sup>。墓に侵入する悪い奴が居たら早速氣づいて角で突きかかる、という姿勢である。陝北畫像石で墓門の扉にこれが表はされてゐるのも同じ趣旨に違ひない。沂南のこの畫像ではそのやうな特定の任務を與へられてゐない状態である。

獬豸のすぐ左に通天冠をつけた人頭をもつ鳥がゐる。圖31下の武氏祠の畫像ではこれに手がつき、西王母に向つて草が何かを差出すものがあり、圖33では同じ姿の鳥が東王公に同じしぐさをしてゐる。沂南のものは手がなく、同じ神かも知れない。人頭鳥身の神は色々あるが、かぶり物にも進賢冠<sup>33</sup>、武冠<sup>34</sup>と相違が認められる。人面鳥身といはれる神は『山海經』にもいろいろと出てくるが<sup>35</sup>、これがどれに當るか決める手がかりがない。

西半の中央より少し左の下段には蛇の體に二つの人首がついた神が居る。これは延維と呼ばれたものと思はれる。『山海經』、海内經に

有神焉、人首蛇身、長如轅、左右有首、衣紫衣、冠旃冠、名曰延維、人主得而饗食之、伯天下

と。即ち、神がをり、人間の頭に蛇身、長さは馬車の轅ほどで、左右に二つ頭がある。紫の上衣をつけ、赤い冠をかぶり、延維と呼ばれる。人主がこれを得て御馳走をしてやれば天下に覇をとることができる、と。これに當らう。

素性の知れるものがかう少數では仕方ないが、ここに集められた鬼神は朱雀、玄武のやうに天上に屬するものばかりではなく、延維のやうに、地上の特定の聖地にゐるとされるものも混つてゐることが知られた。

ほかにこの一群の像を見て氣がつくことは、大きな頭をもち、人間のやうに立ち上つた者が多いことである。これらは腿に斑紋があり、前肢で大きな身ぶりをする所に共通の特徴が認められる。これらがどういふ類の鬼神か明かでない。一方この

炎帝、その神は祝融」とある。この神像は炎帝か祝融か、といふことになる。ここの注に鄭玄は、

炎帝、大庭氏也

といひ、疏には

春秋説云、炎帝號大庭氏、下爲地星、作耒耜播百穀、曰神農

とある。即ち『春秋説』にいふ、火帝は大庭氏と號し、地上に下つて地皇となり、耒耜を作り、百穀を播いて、神農といはれた、といふのである。この『春秋説』は緯書で、鄭玄などもこれによつてゐたといふ<sup>47)</sup>。炎帝が神農氏とするとうなうか。

後漢の畫像石では神農氏は先が二またになつたすきを持つた形で表はされる。前に参考にした武梁祠畫像でもさうであり、おまけに他の祝融以下の聖王と異なり、神農だけは短いズボンを着用した百姓の姿で畫かれ、問題の連弧状のヘリのついた上衣を着てゐない。この圖像はそれでは祝融といふことにならうか。この八角柱南面最上部の神は、この獨特な上衣の下にむき出しの足のぞいてゐるが、武梁祠の祝融の像(挿圖4)もこの點で他の文化英雄ときは立つてゐる點共通點がある。武梁祠の祝融はすそが連弧状になつた衣服の上に、前に合せ目のない短い上衣を着てゐるが、問題の沂南の像も同様前に合せ目のない



挿圖4 祝融像 武梁祠第一石 約1/2

上衣のすその線が僅かに認められる。武梁祠の祝融は頭に巾を着けてゐると思はれるが、沂南の像も頭を目の荒い纏のやうなもので包み、頭上に何か不定形なものが見え、通常の冠は着けてゐない點、共通の所傳に基いてゐることを思はせる。頭の後の圓光は武梁祠の方に認められないのであるが。武梁祠の畫像石では祝融の像の榜題に

祝融氏無所造爲、未有耆(嚙)欲、刑罰未施

と、即ち祝融氏は造爲するところなく、未だ嗜欲あらず、刑罰

未だ施さず、とある。未だ何も人間文化の創造をすることもなく、その意欲もなく、刑罰も従つて用がない、といふ老莊的な治を行つた文化英雄(?)にされてゐる。

この柱の南面の像が祝融とすると、これと背中合せの北面の像は同じ『禮記』月令に「その帝は顓頊、その神は玄冥」といふ玄冥といふことになるかも知れない。この圖像は大體祝融と似てゐるが、頭に縞布冠のやうな簡単な冠(49)を着けるらしく、連弧状の長い上衣の下から長いたつぷりしたズボン(袴)が見える。また拓本が十分はつきりしないが、手に雉のやうな尾の長い鳥を持つてゐるらしい。玄冥といふと刑殺を司る神、降雨などを司る神、水利工事をする官などとされるが、それが雉のやうな鳥をかかへるといふ説はなく、またその由來を説明することも難かしい。これについては後考に俟ちたい。

なほ祝融と玄冥(?)は西王母、東王公と伍してこの柱の南北面の頂部を占めてゐるのであるが、西王母の信仰が後漢時代に盛んであつたことを考へると、この南北の神を祝融、玄冥(?)とすると彼等の影が薄いやうに思はれる。然し『漢書』百官公卿表の注引の應劭によると、彼等も上公に封ぜられ、「貴神」として政府の祭りを受けたとされ、單に傳説に名が出てくるだけ、といふ神ではなかつたのである。

さて、この柱の南面の中央にはもう一人の坐像が見出される。肩から羽毛のやうなものが立ち昇る點、西王母、東王公と同様で、やはりこれらと同格の神像のやうである。これが南面中央に配されてゐるのは、月令の記述の體裁と對應させてみると興味深い。即ち、月令では春、夏の記述の次に

中央土、其帝黃帝、其神后土

とある。東西南北と中央の五方を羅列的に記述するに、中央を南に當る夏の次に置いてゐるのである。この畫像で南方の祝融の下(次)に表はされたこの神像が五方の中央に對應するのではないかと想像するのはかういふ所からである。さうとするとこの神は后土といふことにならう。この神像はその兩手のポーズに特徴があるが、このやうなポーズは先に筆者が天皇帝や黃帝に當てた鏡紋中の圖像にも見出される。(52)



南海之外、赤水之西、流沙之東、……有三青獸相并、名曰雙雙、(郭注、言體合爲一也)

と、即ち南海の外、赤水の西、流沙の東に三青獸の相ひ并さつたものがあつて雙雙といはれる、とある。雙雙といふ名からして、三青獸の三は二の誤りと思はれる。今の圖像に當てるならこの方がよさうである。

雙雙から一頭おいて左に双頭の鳥がある。尾羽根は孔雀の羽根のやうで、頭に冠羽のある點、鳳凰の類といへよう。この類の表現で直ちに思ひ起されるのは比翼鳥である。『山海經』海外南經に、

比翼鳥在其東、其爲鳥青赤、兩鳥比翼

と、即ち比翼の鳥がその東にゐる。その様子は青赤色で二羽の鳥が翼をならべてゐる、といふものである。ここに郭璞は注して「鳧に似る」といふが、圖47下の祥瑞圖の比翼鳥は確かに水鳥の姿をもつ。この點いま問題の鳥と合はない。<sup>(4)</sup>

以上によつて考へるに、<sup>(4)</sup>前室北壁楯石、前室と中室の過梁の鬼神群は、群の性質を多少異にしてゐるが、主として中國世界を遠く離れた地域に棲む鬼神、中國内の特定の山や澤に棲む鬼神が、大體その棲むと信ぜられた場所の方角に應じて畫かれてゐる、といふことになる。

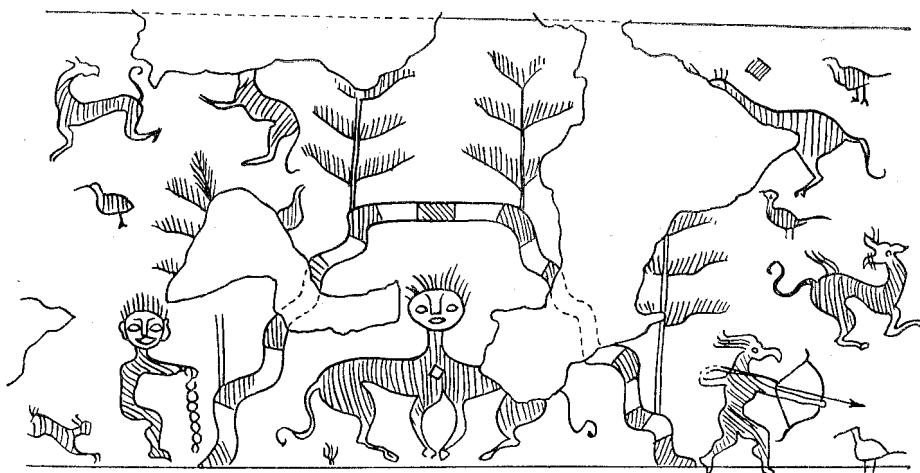
#### (6) 中室八角檠天柱

次に中室八角檠天柱の鬼神を研究してみよう。これと同様、八面に鬼神を表はした八角柱は前室にもあるが、この方は畫工のスクールのせいもあつてか、各鬼神の形から特徴を掴みうる圖像の割合が低いので、この度は検討の資料から外した。

中室八角檠天柱の各面を展開して示したのが圖5である。東面と西面の最上部をみると、天蓋の下に坐る神がある。東面の神はひげを生して几に馮り、西面の神は頭に矢羽根状のもの―簪らしい―を澤山つけてゐる。東が男性、西が女性であることは間違ひなからう。漢代で東西に對になつた男女の神といふと直ちに東王公、西王母が思ひ浮べられる。圖2では兩神とも上擴がりの天柱の上に坐つてゐたが、この場合は少々様子が違ふ。下方に上が鋭くとがつた山が重疊する上に、節くれだつた樹

が立ち、上の擴がつた枝葉の上に座が設けられてゐるごとくである。<sup>46</sup>山上でなく、山上の樹木の上に棲むといふと、或ひはこの東西に配された二神は東王公と西王母ではないのではないか、との疑ひが生ずる。頭には通常西王母が戴く玉勝も見當らない。また男神の坐る樹の下に戟を持った男が二人立ち、女神の坐る樹の下に並ぶ山の頂きに座が設けられ、肩から羽毛のやうなものが立つて神と思はれる者の坐像があるのも、通常の東王公、西王母像に見ない所である。然し陝北畫像石にはちやんと玉勝を戴き、兔にかしづかれた西王母が、とがつた山の上に立つ節くれだつた樹の幹の頂上に坐る畫像が見出される。<sup>47</sup>すると沂南のこの樹上の神もやはり西王母、東王公の表現の一ヴァリエーションと認めて差支へないのではなからうか。疑問の點も残るが、ここには假にさうとして別々の證據の出現をまつて斷定することにしよう。

この柱の東西面の頂上を占める兩神から九〇度回轉した位置には、圓光をつけ、すそが連弧狀になつた衣服を着けてゐる點で共通する二神が南北に背中合せになつてゐる。この一對はどういふ神であらうか。かういふ姿をもつた神像は今のところ類例がないので確定的なことを言ふことはできないが、南面の神は祝融ではないかと考へられる。手がかりは服裝である。ゑりに波狀の飾りのついたものは沂南畫像石墓では堯舜、齊桓公<sup>48</sup>など身分の高い男性によつて着用されてゐる。この畫像でも東王公にこれが見られるのであるが、これは手掛りにならない。ここでは注目すべきは衣服のすそである。連弧狀をなし、縁飾りがつく。このやうなすそをつけたのはかまは『釋名』釋衣服に縁裙と呼ばれるもので、<sup>49</sup>これを男女とも着用したことは畫像石によつて知られるが、<sup>46</sup>問題の圖像のものはかまではない。圖5の南面の圖像のものはかまにしては短かすぎる。北面のよく似た圖像では下からズボン<sup>50</sup>(袴)がのぞいてゐる。さうすると、この連弧狀のすそのつくのははかま(裙)ではなく、上衣の長いものと見なさる。このやうなすそが連弧狀をなした上衣は畫像石や壁畫、遺物中に通常見かけない。所がこの特異な衣服は武梁祠畫像中で祝融、黃帝、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜など、中國文化の創造者達の像に見出される。このことから、沂南畫像石の今問題の圖像もこの類ではないか、と先づ推測される。ここで思ひ出されるのは、『禮記』月令に春夏秋冬中央に割當てられ、五行に配當された帝と神である。この像は南面にあるから四季でいふと夏に當ることになるが、月令をみると「その帝は



挿圖5 山と鬼神 汲縣山彪鎮1號春秋後期墓青銅尊・約原寸

(2) フリア美術館藏の山紋青銅尊

圖9はフリア美術館藏の青銅尊の器側の紋様の展開圖である。このやうな紋様の青銅尊は他にも類例があるが、この例はその精緻なもので、またその紋様の展開圖風の寫眞が手許にあるために採りあげた。上下二段に帶狀の紋様帯があり、圖式的に表現された山が高低交互に連續し、原則として山腹および、山頂と山頂の間の空中に一匹づつ動物乃至龍その他の鬼神像が表はされてゐる。山の輪廓の中に一つづつ鬼神を納める表現技法は挿圖5に引いた汲縣山彪鎮一號墓出土の春秋後期の刻紋の尊に遡るものである。中には自然にゐる動物を表はしたと思はれるものも混るが、龍の類、人のやうに立つた動物形のものなど、明かに鬼神と知られるものも多數である。この山が鬼神の棲む世界であることは疑ひない。この山は器側をとり巻いて圓狀に連なつてゐるのであるが、さうすると西王母、東王公こそゐないが、これも圖7の鏡紋のごとく、自己の住む中國ないしそれを取り巻く地上世界の果てに連なる、鬼神の棲む山の世界を表はしたものでないか、と考へて見る必要がある。ここに表はされてゐるのが一般的な山嶽紋で、山だから動物や鬼神が何とはなしに適宜かきそへられてゐる、といふ疑ひもあるから、一應検討しておく必要があらう。

この尊の帶狀の紋様帯の中には、方角の目安になる顯著な鬼神が見當ら

ないが、圖9左端の、獸鑲に下半がかくれた鳥を朱雀とすれば、ここが南といふことになる。各帯で低い山一つ挟んで高い山と山の間一つが四五度といふことになり、右端の山は南南西といふことになるが、その山に當るところ下段に象が居る。象は圖7の鏡紋では西南に當る所にゐる。南に當ると假定した位置、朱雀の下に當る下段に側視形の表現の、角のない龍がゐる。同様な角のない龍は圖7の鏡の南に當る方角に、また沂南畫像石、圖5の八角柱の南面にも、圖6の過梁の東南乃至南に當る所にも見える。下段、西南西に當る山の下に頭の尖つた奇妙な人間形のものが二人、手を上げて踊つてゐる。圖12でも西王母の近く、その西南方に仙人が手をあげて踊る。かうみると、さきのこの圖像の方位についての假設は蓋然性が強いと見てよささうである。この環狀に一まはりする山と鬼神、動物たちの光景は、朱雀のところの鑲を南にした、東西南北各方を表現したものと認めてよいのではなからうか。もつとも圖9上段、東南東に當る所に牛が走つてゐるが、圖7では西南、圖5では北に居り、これは合致しないのであるが。

圖7の鏡背紋の世界が、山は地平線に低く、申譯程度にかきそへられただけで、そのあたりに棲む鬼神は、大部分空間に足がかりも殆んどなしに表はされてゐるのに對比すると、圖9の世界は、圖式的ではあるが山が並び、鬼神はその中を走り、或ひはその上に足をかけてゐて、その棲む世界の表現は大分具象的であるといへよう。『山海經』五藏山經をみると、どこどこに山があつて産物は何、住む動物は何、そこにこれこれの姿をしたかういふ鬼神がゐる、といふ式に記述されてをり、『山海經』の他の經でも鬼神と山とは不可分の關係で記述されることが多いことは、改めていふまでもあるまい。圖9では、山は頗る圖式的な表現で、それぞれの山同志に殆んど個性がなく、互ひに他と區別することは難かしいが、鬼神が大體一つの山に一種といふ原則で畫かれてゐるのは、鬼神の在り方に對する當時の觀念と合致してゐるといふことができる。鬼神は『山海經』でその棲む山に結びつけた形で記述されてゐるといつたが、そもそも『山海經』といふ書物は中國の世界を、遠近にかかはらずすべて東西南北四方に仕分けされた山、といふ形で秩序づけて記述してゐるのである。圓筒狀のスペースを八乃至一六に分割し、そこに相ひ連續する山を配し、山といふ座標の上に鬼神を配置するといふのは、戰國時代以來の中國の世界像の一つの

他に、この八角柱の畫像に出てくる動物形の鬼神で文獻中にその名が見出されるものとしては、西北面の中央あたりの一角獸、獬豸ぐらゐで、意外とさびしい。それは兎も角、この柱の東西兩面頂部には天地間の中繼地、高山の頂上の樹の上に居て人間の壽命に深い係りを持つ西王母と東王公が居り、南面には祝融と后土、北面には玄冥(?)といった神話的帝王、行政官が配され、いはば地上世界に直接關係をもつた東西南北中央の神が揃へられてゐることが知られた。

以上によつてみるに、沂南畫像石墓は入口の正面左右の柱には西王母、東王公といった人間の生命の増益を司る神、男女を結びつける高媒その他が畫かれ、前室に入ると正面の通路を挟んで天上の四方の星宿の精である四神および天の中央の神、天帝の使者の像が頭張つてをり、その上方の楣石には中國の四方や中國の領域内に住む鬼神が奇怪な姿を誇示してゐる。また圖には示さなかつたが左右の壁にも夫々對應する方角の鬼神像が大きく扱はれる。前室と中室の眞中に立つ八角柱各面には夫々對應する方角に住む鬼神がひしめき、この柱に支へられる梁の兩面にもあひ似た素性の鬼神が列をなしてゐる。中室の八角柱にはまた四面の頂上に地上と係りの深い傳說的支配者像が君臨してゐるのである。つまり人間の壽命や禍福と關りの深い神神、宇宙の運行と調和を司る鬼神たち、地上の遠近四方八方に住み、隨時祥瑞などの形で出現し、或ひは辟邪のためにお出でを願ふ、といった形で何等かの影響を日常生活に及ぼす鬼神の類が、畫像の形で墓室の中に移され、いはば小宇宙を構成してゐるのである。墓の被葬者は生前にこれらの鬼神が現實に住み、支配すると信ぜられる世界に生きてゐたのであるが、死後に住むことになるこの墓の中に、畫像の形で鬼神が移し入れられてゐるわけである。これら畫像の形で墓中に繪姿を畫かれた鬼神はその住者に名と姿形を認識されることにより、その生者の世界において行使した能力——世界の秩序と調和を保持し、生命と生産を増強し、或ひは邪惡な精靈を追ひ拂ふ力——を大いに發揮することを要求されたものに違ひない。

## 二 青銅器物などに表はされた鬼神の世界

沂南畫像石墓から看取することができた、鬼神群をもつて形造られる世界は、他にも見出されないであらうか。次にこれを見てみよう。

## (1) ポストン美術館藏の西王母東王公鏡

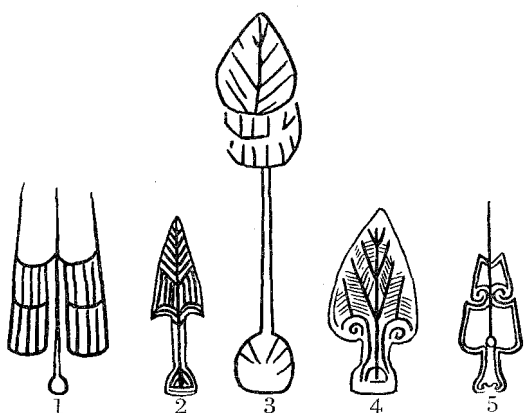
圖7に示したのはポストン美術館藏の西王母東王公鏡の主紋のみを寫したものである。圖には略してあるが、この鏡の周縁の版木風の浮彫の圖案化された鬼神紋の表現は所謂方格規矩四神鏡などに見る所であり、後漢のさう晩くまでは降らぬものと考へられる。この鏡紋は左に玉勝をつけた西王母、右側に鈕をへだてて對稱の位置に東王公が表はされてゐる。西王母の近くには藥を搗く兔、香爐を持つ仙人等がをり、東王公にも近くにコップを差し出す仙人、藥を搗く赤松、王僑が表はされてゐる。珍しいのはこの兩者をつなぐ空間に沂南、徐州などの畫像石に見出されると同様な、様様な種類の動物や鬼神が充満してゐることである。東西に東王公と西王母の配されたこの圓弧狀の鏡背紋の帯が、自己を圓くとり巻いてゐる、この兩神のある地帯を含んだ空間であることは容易に推測されよう。そして沂南畫像石において四方ないし八方に對應する横長の、ないしは縦長の長方形の中に分割されて表はされてゐた鬼神が、ここでは圓形の空間に連續的に表はされてゐると解釋される。

東王公の下には山陵の線とも思はれるものが見え、また圓弧の内、外縁に沿つて所所に山が畫かれ、これが抽象的な空間ではなく、中國世界の上空であることが示されてゐる。

圖式に合致した方式であつたのである。

(3) 四山四龍紋鏡

圖8に示したのは戰國末から前漢初ごろの四山四龍紋鏡の背紋である。四方に木の葉のやうな形のもの放射状に出、その間の空間に互ひに咬みつき合ふ龍の類が入れられてゐる。この木の葉のやうな形のは、よく見ると樹木であることが知られる。この葉狀の形は上下に向つて山字形に三つの尖りの出た曲線を上下に重ねて形造られてゐるのであるが、これと共通したものは所謂草葉紋鏡の草葉形(挿圖6、(1))にも認められる。挿圖6、(5)は同式の鏡に(1)と同様に用ゐられた紋様單位であるが、圖8の今問題の形と挿圖6、(1)の中間形とみられよう。さて、挿圖6、(1)に見られる鱗形を細かい平行線で埋めた單位は、圖



挿圖6 漢の鏡と塹の樹木 (1) 鏡 約原寸 (2) 塹 約 $\frac{1}{6}$  (3) 塹 約 $\frac{1}{6}$  (4) 塹 約 $\frac{1}{6}$  (5) 鏡 約原寸

10の左の方の樹木にも見出される。樹の下枝の方をこのやうに表現する技法は、挿圖6、(2)、(3)に示したとき、漢代の墓塹にスタンプで捺した樹木にも類例がある。圖8の樹木では渦紋の要素が加はつてゐるが、それに近い表現をもつた樹木もやはり墓塹のスタンプ紋にある(挿圖6、(4))。挿圖6、(2)―(4)のスタンプ紋の樹木もいゝ加減圖式化してゐるが、圖8、挿圖6、(1)などは更にその程度の進んだものである。

圖8の、いま樹木であることを明かにした表現の根本のところには、節のある凸線で表はされたごつごつしたものがある。木の根にしては大きすぎる。恐らく山と思はれる。圖7で内外の縁沿ひに山が表はされてゐたが、この鏡紋にも外縁沿ひに所々これがあり、これを山とすると樹木の根方にあるのもその表現において區別することができないからである。山の輪廓を節のついた幅のある線で表現

する傳統は挿圖5に引いた春秋後期の尊に遡るものである。

圖8の樹木は四本とも同じ表現であるが、その下の山は四つがみな異なつてゐる。この山は單なる紋様單位ではなく、夫々に特殊的な山を描いたものに違ひない。鏡背の環狀の紋様帶を四方の世界に見立てる表現は圖7のやうな例があり、また先に筆者が漢鏡の圖柄を論じた際に幾つか引いたが、この山と樹は中國世界の四方にあるものを描いたものと考へられる。圖5では西王母と東王公が中國の東西の果てに聳える山頂の巨大な樹の上に坐してゐたが、東西二方だけである。四方に顯著な山があり、その上に木がある、といふ話は文獻には残らないやうである。『淮南子』墜形訓に東方の陽州にある扶木、南方の都廣にある建木、西方の若木が記されるが、北方は缺けてゐる。今問題の鏡背紋の樹木はみな一樣な圖式化された表現になつてゐて、果してこれらの中に扶木、建木、若木といふやうな特徴のはつきりした木を認めてよいかどうか決し難い。ともあれ、世界の四方の果にこれこれの特徴的な形をもつた山があつて、その上に高大な木が立つてゐる、といふ傳説があつて、それを背景にかういふ圖柄が作られたことは疑ひない。

山と樹木が鏡の中心から放射狀に表はされてゐたのとは反對に、それらによつて區切られた空間に置かれた龍その他の動物の圖は、外縁の方から見るやうに表はされてゐる。圖を子細に見れば自らわかることであるが、この紋様の構成について大體の解説を加へておく。各區とも大同小異であるが、頭を左にして波狀に體をくねらせた大きな龍が四分ノ一圓のスペースほぼ一ぱいに表はされる。この龍は小さい龍を咬み、この咬まれた小龍は大きい龍の胴を咬んだ動物の尾をくはへる。大龍に咬まれた小龍の尾にはまた小動物が咬みつく。大龍の胴の後方にも小動物が咬みつき、大龍の胴の下と尾のあたりにもう一匹の小動物が配される、といつた所である。

世界の四方に配された龍といふと、『墨子』貴義篇に引かれる日者の説に、五行の對應する日に帝が青龍、赤龍、白龍、黒龍を夫々對應する方角において殺すといふ説がある。その日の行動について四方の龍に引掛けて吉凶を論ずる一派の説であるが、細部の理窟づけは不明としても、四方に龍がゐる宇宙、人間世界の秩序に何等かの影響力を及ぼしてゐる、といふ所傳を



基に發生したものであることは確かである。この鏡背に咬みつ咬まれたの複雑な相互關係をもつて小龍小動物と共に表はされてゐる四匹の龍は、この東南西北各方にゐる青、赤、白、黒の各龍であることは、大いにありさうなことと思はれる。

以上により、日常の化粧に使ふ鏡とか、或ひは酒盛りに用ゐる尊などの器物に、沂南畫像石墓とはまた異なつた形で鬼神の棲む世界が表はされてゐることが知られた。これらの器物の所有者は、これらの世界の住人のもたらず生産力、生命力の強化の力を我がものとし、自らの幸福の増進に役立てることができると信ぜられたに違ひない。

ほかに圖10は徐州十里鋪の畫像石であるが、龍と虎が對ひ合ふ極めて單純な圖柄である。これもこれまで見て來た宇宙乃至中國世界の表現についての知識をもつて見れば、これでやはり世界を表はすと考へられるのである。即ち、龍虎は不規則な波形で表はされた山並の上を歩いてゐる形で表はされる。この山は圖9でみたやうな、地上世界を代表する山で、その上方の龍と虎は天空の青龍の星宿と白虎の星宿を表はすものと見られる。青龍の後に樹木がぼつんと立つ。青龍は五行で東方に配される所からみれば、この木は扶木のつもりに違ひない、白虎の尾と後足の間に、頂上が何か瘤狀にふくれた山がある。上が擴がつた崑崙山の表現と解釋を加へることができる。一見大した意味もなささうな圖だが、これも山と鬼神で廣大な宇宙と中國世界を描いたものと知られた。

### 二三 畫像石その他に部分的に表はされた鬼神の世界

第一章第二章に記したのは、それだけでもつて完結した何等かの次限の鬼神の世界の圖である。畫像石や器物を裝飾する圖柄の中には、さういつた鬼神の世界を部分的にとり出して表はしたものも多い。ここにはその類をとり上げて検討する。

## (1) 安邱畫像石墓、後室西壁畫像

圖11は安邱畫像石墓の後室西壁の上半部の畫像である。中央やや左寄りに山がある。山の輪廓が刻み目を入れた凸線で表はされてゐる點、圖8の鏡背紋の山の表現を襲つてゐる。山には木が澤山生え、鹿その他の動物が遊び、山頂から雲氣が湧き上つてゐる。山の麓に頭を寄せ、こちらを向いてうづくまる雄鹿が二頭大きく畫かれてゐる。二四三頁に指摘した春秋—漢の傳統に照せば、これがこの山の神らしい。この大きな二匹の鹿を見れば、當時の人人にはこの山が何といふ山かわかつたはずであるが、我我には今のところ明かでない。

山の左手には澤山の獸が群がつてゐる——のかと思ふと、群の右手の方には仙人がをり、翼の生えた獸形の鬼神も見え、左の方には獸身鳥頭の神もある。ここは鬼神の棲む世界の一角である。一方、山の右手には狩獵の光景が展開する。ここには鬼神は見えず、現實の世界のやうである。右端には枝の絡まつた大きな木があつて猿と犬が繋がれ、下には弓を持つて木に向ふ人物も見える。このテーマは武氏畫像石で墓の主人のある宮室の脇に畫かれる樹木を中心とする光景と共通する。

筆者は以前に西周時代の叢林や池沼のある聖地における祭祀、田獵の傳統的な關聯が戰國時代にまでつづいてゐて、それがその時代の青銅器の畫像紋から看取され、それが漢代畫像石の宴樂の場と隣接した所で狩獵漁撈が行はれ、そこに鬼神が出現するテーマにまでつながつてゐることを論じた。圖11にいま取扱つた、この鬼神の棲む山と鬼神の群棲する空間、それに隣接した地での狩獵といふこの畫像は、まさに西周から春秋時代を経て漢へと傳統をたどることのできる由緒ある畫題の一つなのである。

## (2) ド・ヤング美術館藏山紋塗金青銅尊

圖12はド・ヤング美術館藏の塗金山紋青銅尊の器側の拓本から描き起した圖である。山の形は不規則であるが、大體等間隔、

てこれを迎へる男の畫がある。これも『山海經』海外南經に出てくる不死民ではなからうか。

不死民在其東、其爲人黑色、壽不死、一曰在穿匈國東

と、即ち不死民はその東にある。その様子は色が黒く、長生きで死なない。一説では穿匈國の東にあるといふ、とあるものである。『淮南子』墜形訓でも穿曾民と同じ所に記されてゐる。これら南方の果てにゐるといふ人間が、この畫像石で西方の西王母の近くに畫かれてゐる點不審である。然し同じ『淮南子』でも墜形訓に穿曾民と同じ方角に居るとされた裸國が、説林訓には「西方之裸國」と記されてゐる。穿曾民や、不死民についても南方でなく西方のものとする異説があつた可能性が十分に考へられよう。

不死民の上方の人身蛇尾の鬼神は手に二叉になつた道具を持つ。圖2にもあつたやうなコンパス(規)で、女媧の持ち物である。女媧の前に二人が坐り、後に犬、更にその左に棒切れを持つた男、犬がつづく。これらは何者であるか不明である。女媧の右には雲氣の上で手を振廻す裸の人物がある。これも何者かわからない。<sup>(63)</sup>

圖13中に示した圖の下邊左半は風伯、雷公のテーマである。ほぼ中央に家屋があつてその左に片膝を折り、片足を投げ出した姿勢で口に植物状のものを當てるやうなしぐさをしてゐるのは、シャヴァアンヌ(64)もいふやうに風の神である。口に火吹竹のやうなものを當てて風を吹き出す所と思はれる。家の屋根が強風で吹き上げられてゐる。風伯の後には五人の男が引綱を肩に車を引き、上に一人の男が乗つてアーチ状に連ねた太鼓を打つ。雷の神、雷公である。<sup>(65)</sup> 風伯と雷公の中間、上方に二人の男が曲つた樹枝状のものを持つて歩いてゐる。圖26下の雷公の下の車に乗る神も細い樹枝状のものを持つ。雷に伴ふ雷光を扱ふ神に違ひない。雷公の左に何か草が生えたやうな表現の盃を頭にのせた人物が二人ある。或ひは雷に伴ふ雨水を司る神ではなからうか。雷光、雨水を司る神の後に棒を持つて従ふのはその従者と思はれる。

雷雨に襲はれ、屋根を飛ばされさうになつた家の中には、主人と思はれる者が弓を持つて端坐し、その前、室内と屋外に一人づつ、家の後にも二人の侍者が立つてゐる。『禮記』玉藻に

若有疾風迅雷甚雨、則必變、雖夜必興、衣服冠而坐

と、即ちもし疾風迅雷大雨があつたら必ず變がある。夜間でも必ず起き、衣服と冠をつけて坐つてゐるやうに、とある。注には「天の怒りを敬するためだ<sup>(66)</sup>」といふ。この圖像は雷雨が襲來したので警戒態勢をとり、弓を持つて端坐してゐる所である。『禮記』に記される通りのことが漢代實際に行はれてゐることが知られる。この端坐する人物は破風内壁の中央の主要な位置を占める家屋の中に坐るところから、始めは或ひは傳説中の名ある人物で、その宮殿が風伯によつて吹き飛ばされた、といふやうな話でもあるかと想像したが、そのやうな話ではなささうである。この畫の主役は風伯で、屋根を飛ばされた家と中に坐る主人は、その威力を試されるだけのそへ物だ、といふ風に解釋しておく。

風伯はそれではなぜ西壁破風内壁の西王母に對し、東壁の同じ所に畫かれてゐるのか。漢代に風伯は箕星<sup>(67)</sup>だといはれるが、箕星は東方青龍の宿に屬する星宿である。この風伯が箕星であれば、當然東方に配さるべきである。

家屋の右側、屋根と同じレベルには三人が右に向つて歩み、二人が迎へる光景、家の床と同じレベルには右から左へ、體は正面に向け、頭を右に向けて立つ二人、刀をかまへた男に對ふ男が二組畫かれる。何の光景か明かでない。家の屋根の右上方にはアーチ形の雲氣の下に坐る人間がある。これも何者か不明。虹を表はす畫像は中間の破風形の梁にあるからこれは虹の神ではない。三角形のスペースの頂上近くにゐる人身蛇尾の神は先にも觸れたやうに伏犧である。その象徴である曲尺(矩)を執つてゐる。その後には圖13、上にも見たやうな手を振り廻す裸の男と雲氣が畫かれてゐる。

以上にみたやうに、孝堂山祠堂破風内壁の畫も、鬼神をその本來棲むと信ぜられた東西の方位に對應させて畫いてゐることが知られた。畫かれてゐるのは然し鬼神の世界の一部分で、全體をおほふものでない點に第一章に記したものと相違がある。

鱗狀に列なり、圖9にみるのと同様、山一つに鬼神一の原則で鬼神が彫られてゐる。圖9の圖柄で山はみなほぼ同形等間隔に表はされて互に同格であり、中國世界四方の山を環狀に並べたものと見られるのに對し、この圖12の例はさうでない。圖柄は鳳凰形の環狀によつて二分されてゐるが、圖12でいつて左半の中央上邊に工字形のもの―玉勝の簡略な表現と思はれる―を頭にのせた坐像が見える。これが西王母で圖柄の中心をなす。そしてこれの眞裏にあたる、右半の中心を境に、鬼神は大體みな西王母の方に向つた形に表はされてゐるのである。

圖像についても少し説明を加へれば、西王母の左右に白を前にした兔が居ることよくある例の通り。兔は杵を持たず、出來上つた藥を容器に入れて持つてゐるやうである。左の兔の坐つた山の下には後半身が鳥になつた人身の神が二人、西王母の方に向く。獨特なかぶりもの前に出るものはかんざし(勝)の類と思はれる。右の兔の下には片手に三足の鳥をのせた仙人が立て膝で西王母の方に身を乗り出してゐる。三足鳥は漢畫像石では多く仙人を伴はないで西王母像と共に表はされてをり、<sup>(58)</sup>『山海經』の郭注その他に西王母の世話をやく者とされる。<sup>(59)</sup>西王母の眞下の山には大きな雞を前に、香爐を捧げる仙人が立つ。香爐を持つて西王母に侍る仙人は圖7にも出てきた。この仙人のある山の並び、左の山には九尾狐がある。九尾狐が青丘といふ山にゐることは先に二三六頁に引いた。ここが青丘らしい。香爐を持つ仙人の右の並びの山には皮弁をつけた人頭の四足獸がある。これは何者か不明。九尾狐の上方の山に二人の仙人が踊る。これについては二四四頁に觸れた。

右半についてみると、中央上部には何か巨大な熊頭がみえ、その右に別の動物が匍ひつくばつてゐる。大きな熊頭の左は背中が高く突出した人頭四足獸。何といふものか不明。その左下の山には鹿に乗つた仙人、その左下の山には龍がある。龍の右の山には皮弁(?)をつけた人物が二人、膝をかかへて坐り、顔を向ひ合せてゐる。これも何者か不明。その右上、大きな熊頭の下は鳳凰である。『山海經』西山經に

昆侖之丘……有鳥焉、其名曰鶉鳥

と、即ち昆侖の丘の……鳥がをり、鶉鳥といはれる、といふ。郝懿行はこの條の箋疏にこれが鳳凰であることを證してゐる。<sup>(60)</sup>

ここに畫かれた鳳凰はこれに違ひない。鳳凰の右には武冠をつけて騎射する人物が一騎表はされてゐる。西王母のゐる山の近邊で狩獵する人、といふと圖11の鬼神の棲む山の麓で狩獵が行はれる圖が思ひ起される。聖地における狩獵といふ古い時代からの傳統の畫題として理解される。騎射の人物の左下には龍がゐる。

(3) 孝堂山石祠東西破風内壁

圖13上、中は孝堂山の板石で作つた祠堂の東西壁の内側、破風に當るところの畫像である。この祠堂にはこの東西壁の中間に同じ破風形の梁が一枚入つてゐるが、上中にかかげた二枚の畫像が對をなすものであることは、東西に人身蛇尾の伏羲と女媧が相ひ對してゐることから察せられよう。圖13上は西壁であるが、ここに寫した部分(下にはまだ現實世界を畫いた畫像がつづく)の中央に西王母の坐像がある。襖を着け、耳に珥が垂れるが勝は着けてゐない。右には盤に盛つた團子を、左にはコップに入れた飲物を捧げる侍者がゐる。それらの左右に各三人の草を捧げる侍者が坐つてゐる。左方の五番目の侍者の頭は鳥と思はれ、四番目のも人間でない。シャヴァアンヌはこれらを牛頭、馬頭と解説してゐる。その左には白で藥を搗く二匹の兎、その左には犬乃至狐のやうな動物を置いて三足鳥がゐる。これらは漢代の西王母の畫像に普通に伴つてゐるものである。同じレベル、右の方に戟を持つて立つ二人の大男は西王母の從者かどうかわからない。その右外には外に向ふ鳥獸が畫かれる。

西王母の頭上、二人の人間に棒でかつがれた人間が二人をり、左方にはこれを迎へる男三人と子供一人が畫かれる。シャヴァアンヌはこれを『山海經』海外南經に

貫匈國在其東、其爲人匈有竅

と、即ち貫匈國はその東にある。その人間の姿はといふと、胸に孔があいてゐる、といふのに當ててゐる。圖のかつがれ方は胸に孔がない限り難かしい。貫匈國の人と見てよからう。貫匈國は海外南經に出てくるが、『淮南子』墜形訓でも穿曾民として海外三十六國のうち西南から東南の間にある者に擧げられてゐる。この貫匈國の光景の右に杖をついた二人の老人と坐つ

ば圖21に引いた陝北畫像石の畫像である。左右の端に日と月が畫かれて世界の東西の方角が示され、西王母が西寄りにお決りの侍者やその近邊の住人を伴つて盛大に表はされる。一方右端には三羽の鳥に引かれる雲車が男性をのせて西に向つてゐる。これには從者も何もついてゐない。これが東王公と思はれるが、西王母のそへ物的な位置しか與へられてゐない。即ち、藥を搗く兎、蟾蜍など、西王母の叢族と近い扱ひになつてゐるのである。<sup>(7)</sup>

この中央の男神が東王公でないとするれば誰か。『淮南子』覽冥訓に夏の桀王の時に道が衰へたのを嘆いて

#### 西老折勝、黃神嘯吟

と、即ち西老、即ち西王母が頭に戴いた勝を折り、黃神がうめいた、とある。黃神については高誘注に「黃帝之神」と釋してゐる。<sup>(72)</sup> さうするとここに西王母と黃帝が並び稱されてゐることになる。中央の、西王母より優越した場所を占める男神として、この黃帝はふさはしいのではなからうか。これを黃帝とすれば、東王公とした場合の困難は解消しよう。ここには黃帝とみて話を進めることにする。

次に地上の光景であるが、桀戟を持つた從者のうち右の一人は「雲氣がこのやうに立ち昇つてゐます」と指さし、左の一人は主人にこの旨を傳へてゐる所と思はれる。雲氣の出てくる山の左にゐる仙人は盾と刀をかまへ、「邪魔をするな」と警告するごとくであり、雲氣の根方の一人は雲氣の立ち昇るのを助けてゐるとも見える。家の中からは男と女の使用人が馳けつけ、雲氣の根方の右に立つ仙人は振り向いて彼等に事態を言ひ聞かせてゐるやうである（小山の右下の小女の役割は想像しにくい）。雲氣は何のために天に昇つてゆくかといへば、當然この家に住んでゐた人がこれに乗つて天に登つて行くため、と考へる他ない。さればこそ訪問して來た貴人の從者がこれについて主人に説明し、家の使用人も驚いて馳けつけてゐるのである。雲氣に乗つて昇天して行つた者といへば、雲氣の所所と同じ姿をみせる進賢冠をつけ、笏を持ち、肩に翼の生えた人物をおいて他にあるまい。地上からうねうねとつづいた雲氣は黃帝の右下で途切れてしまふ。然しこの端末にゐたのと同じ人物はもう一度、黃帝の乗る雲氣の左端、黃帝の乗用車の後に現れる。彼の前に立ち、その方を振り向く人物は、地上からここまでやつて來た者を

馬車に誘つてゐるごとくである。地上から雲氣に乗つて昇天し、途中で道を失つた主人公は、いかにしてか黄帝の住む雲氣の端に到達することができ、その車に迎へられることになつたやうである。以上の解釋に誤りないとすれば、昇天したのは地上右端の家の住人で、そこを訪れて來た貴人ではないことになつた。このやうな話が文獻に残るかどうか知らない。主人公の固有名詞はわからないにしても、畫かれた物語の實によくわかる、漢代繪畫の最も興味ある例たるを失はない。

ほかにフェアバンクは同じテーマを畫いた未公表であつた畫像石の拓本を發表してゐる。<sup>(76)</sup>圖16の地上部分から建築物を除いた形の圖柄である。確かに同じ物語を畫いたと見てよからう。この方では馬車から下りた通天冠の貴人は節を持つてゐる。さうすると、訪れて來た貴人はこの家の主人に主命を傳へるために來たといふことになる。

なほ、今検討した圖で翼のついた進賢冠の男が天に登るのを助ける雲氣はS字形にくねり、少し引返しては更に先に進むといふ形をとつてゐる。このやうな昇り方については『淮南子』原道訓に馮夷の昇天を記して

扶搖、抻抱羊角而上

といふのが大體これに當る。扶搖(つむじ風)のやうに、ねぢれて廻轉し、羊角のごとき形の運動をして上る、といふ意味である。<sup>(75)</sup>今問題の圖像の雲氣はまさにそのやうな運動を畫いてゐる。これが漢時代の昇天の運動の標準的なパターンであつたのである。

(2) 北斗君に召された人間

第(1)節に記したのは人間の羽化昇天に關する、恐らく目出たい話を畫にしたものであるが、不幸な昇天の畫題もある。圖18の第四段を見てみよう。左寄りに棒でつないだ七つの圓盤がある。『石索』にも記されるやうにこれが北斗七星であることは問題なからう。右から二番目のところに、仙人が小さい星を一つ持ちそへてゐる。『石索』にこれを杓端の矛招搖にあて、シヤヴァンヌも踏襲してゐるが、<sup>(76)</sup>北斗の第六星の傍にある小さい星といへば輔星に當るべきである。<sup>(77)</sup>漢代の星座の描き方は必ずしも實際に見える通りの配置になつてゐるとは限らないが、<sup>(78)</sup>この輔星があるからにはこれは確かに北斗七星と見て誤りある



#### 四 個別の神話的光景を主題とした畫

第一章、第二章に扱つたのは、個個の鬼神が單獨で、或ひはその侍者を伴ひ、一定の秩序に排列されて特定の次限の世界を構成した圖柄であり、第三章に見たのはその一部分を切り離したものと看做されるものであつた。これらの章でみた類の圖柄では、鬼神は夫々にその棲む場所や鬼神としての働きなどに關する神話的背景を持つたものではあるが、その物語りに焦點を合せて躍動的な光景が畫かれる餘地は少なかつた。ここに扱ふのはそれに反し、鬼神が主役となつて動きのある畫面を構成する類である。畫面ににぎやかな動きがある代りに、中國の四周乃至上空に擴がる廣大な鬼神の世界が、一つ乃至若干の畫面でもつてつくされるといふやうなことはない。次に具體的な例について説明してゆかう。

##### (1) 黃帝のもとに羽化昇天

この類で一番何か面白い話でもありさうなのは圖16の武氏後石室第二石第二段の畫である。シャヴァアンヌ<sup>68</sup>は上邊中央および上邊右寄りにゐるのが東王公西王母で、下邊、地上で馬車を降り立つたのが西王母を訪れた傳説で有名な穆王ではないか、と推測してゐる。さうであれば大變興味深いが、まづ畫面を細かく検討してみよう。畫面の下邊、地上には人の乗つてゐない二頭の馬と三頭立ての馬車一臺が見える。これらが馬車の右に立つ三人の人物の乗つて來たものであることは疑ひない。祭幟を持ち、武冠を着けた二人が馬車の導騎となることは後漢の畫像石の車馬行列に普通に見掛ける所である。もう一人の人物は通天冠をかぶり、身分のある人物と知られるが、幡のついた三頭立ての馬車は『續漢書』輿服志上によると皇太子、皇孫用のものとなつてゐる。通天冠の人物の乗物とみておかしくない。<sup>69</sup>

右側の祭幟を持つた人物の前には二重になつた小山があり、ここから雲氣（雲氣の表現については二五六、二六二頁参照）が立ち昇

り、右の一人がこれを指さしてゐる。曲り角に渦紋の澤山ついたこの雲氣をたどつてゆくと、うねうね曲りながら地上の人物、馬車の方へ水平にのびてゆく。所所に鳥頭がついたり、男女の仙人がのぞいてゐたりするが、かまはずに左に進むと、左邊の中央で行き止りになり、そこに進賢冠をつけ、肩に翼のついた大ぶりの人物が笏を持ち、右向に立つてゐる。その前にもう一人の有翼進賢冠の人物がゐて、右手の方に向つて「こちらへ」といつたしぐさをしてゐる。そこで我我も少し逆もどりして右上の方に折り返してゆくと、進賢冠を着けて笏を持つ有翼の像が左向の姿で、少し先では右向になつて、そして最後に上空中央の有翼男神像の右下の所で左上に向いた姿で現れ、ここで地上から續いて來た雲氣は行止りとなる。

中央男神像の下にはまた一つながりの雲氣があり、うねうね折り返しながら左方に向ふ。男の仙人の御する馬車もこの雲氣の上に乗つてゐる。この雲氣の左端にも進賢冠をつけ、笏を持った先程と同じ姿の像と、その前に立つてこれに向つて振り向く者が畫かれる。中央男神像の右には女神像。串刺しの團子を捧げる女の仙人が侍る。女神像の下にも雲氣があるが短い。女神像の下には女が御する馬車があり、これも雲氣の上に乗るが、この雲氣は短く、どこにもつながらない。

この畫面上方にゐる男女二神につき『石索』は東王公西王母ではないかといふ。上空に畫かれた二臺の馬車にはシャヴァンヌも注意のごとく夫々男と女の御者がゐて、男女二神の乗物とするとうまく解釋がつく。馬車の後に喰み出してゐるのは中乗つてゐる者の翼のごとくである。紹興出土と傳へられる鏡によく見かける圖柄で、鈕を中心に對象の位置に西王母、東王公が坐り、兩者をつなぐ弧形の空間に馬車が配されるものがある。<sup>(9)</sup> 高空に住む兩神の往來のため乗用に供されるものと考へられるが、この畫像石のものと同じ趣向とみられる。

ところでこの畫像を見るに、男神は中央に、女神は右の片隅に畫かれてゐる點、これを東王公西王母とする解釋に疑ひを懐かしめる。東王公西王母が對等の形に表はされてゐる例は今まで引いた圖に幾つか例があつた。この圖では男神は中央にゐて一段と偉く、女神は從の位置に置かれてゐるのであるが、西王母東王公と並び稱されるとはいへ、『淮南子』、『山海經』など比較的古い文獻では西王母の存在は大であつても東王公は出て來ず、東王公こそ從の位置に來るべきものである。例へ

綱でつないだ太鼓をガラガラ引きずるやうな表現、或ひは圖14のやうに圓形につないだ一〇個の太鼓の中に入つてこれをたたき、全體を四人の男が引綱で引いてゐるやうな表現など、變異の程度は大である。もつとも雷公の乗り物の引き手がこれらで總て被髮の男である所は共通してゐる。

ところで『論衡』雷虛篇をみると、

圖畫之工、圖雷之狀、纍纍如連鼓之形、又圖一人若力士之容、謂之雷公、使之左手引連鼓、右手推椎、若擊之之狀、其意以爲雷聲隆隆者、連鼓相扣擊之意也、其魄然若斲裂者、椎所擊之聲也、其殺人也、引連鼓相椎並擊之也、世又信之、莫謂不然、如復原之、虛妄之像也

といふ。即ち、畫をかく職人は雷の形を畫くのに太鼓をごろごろつなげたやうな形を畫き、また別に一人の力士のやうな姿の男を畫き、これを雷公だといふ。そして雷公をして左手でつないだ太鼓を引き、右手で椎をとり、これを打つやうなしぐさをさせる<sup>(82)</sup>。その意味は、雷のごろごろいふ音は、連ねた鼓が互ひにぶつかり合ふ音で、<sup>(83)</sup>パシツと物を裂くやうな音は椎で打撃を加へる音で、<sup>(84)</sup>雷が人を殺すのは、つなぎ合せた鼓を引きよせて椎で次々と打つ時に一緒に人間も打つのだ、と。云々、といふのである。

力士のやうな姿でつないだ太鼓を引くといふ『論衡』の雷公は圖26のものに近い。圖17 18の畫では雷公は神様然と乗物の上に坐つて太鼓を打つ。そして「椎で太鼓を打つと共に人間にも打撃を加へる」といふ『論衡』に記録される説は、椎と鑿とを持つた力士が雷公とは別にゐて人間を殺す、といふやうな分業が行はれてゐる、と解釋できよう。

つづいて圖17で雷公の右を見てゆくと、先頭の引き手の右には長頸の壺<sup>(85)</sup>を持つた女が右に向つて雲氣の上を急ぎ、その右には束ねただけの髪を風になびかせた男——ひげがある——が瓶を傾けてゐる。この男が雨の神、雨師と思はれる。その右にはアーチ形の兩頭龍がある。いふまでもなく虹である<sup>(86)</sup>。虹の上には女が腹匍ひになり、右手に瓶(?)を、左手に長い鞭のやうなものを持つ。これは雷光と思はれる。圖18にもこのやうなものを兩手に持つて走る女がをり、その前に鑿と槌をもつた男が

る。この圖でもこの女の下に鑿と槌を持った男が地上にひれ伏す被髮の男の上にとび乗り、頭に鑿を打ち込まうとしてゐる。雷光に打たれるのはかういふことと表象されてゐたに違ひない。なほこの椎を持った男は圖17下段にみるやうな、力持ちの武士のスタイルである。彼等にも名があつたらうが、今のところ明かでない。虹の兩側にはさらに同様な役割の男——右側の者が鑿を持つてゐないのは既に使用してしまつたものか——がある。地上、虹の右方には恐怖のため髪のため毛が逆立つた男が二人、兩手をさし上げて地上にひれ伏さうとしてゐる。

圖18第二段も大體同じやうな圖であるが、左端に風伯がゐない。代りに雷公の乗り物の引き手と同じ身なりの者が二人、後から乗り物を押してゐる。引き手は圖17では五人であつたが、ここには六人ゐる。雷光を持つ女二人については先に記した。この圖では男の雨師がゐらず、圖17でその後にもた鑿をかかへた女だけがゐる。ここでは鑿の他に大きな碗を持つてゐる。水をかけようといふのに、もう少しましな容器がありさうに思ふが、漢時代には火事を消すのにもこのやうな道具が普通だつたのである。<sup>(87)</sup>圖17と異なり、この圖では虹がなく、兩端に龍頭のついた長くうねつた雲氣の下に人間がひれ伏し、雲氣の上の鑿と槌を持った二人の男に打たれようとしてゐる。右端の邊は石が傷人であるが、更に二人の男が手をさし上げてゐること、圖17と同様である。なほ圖18で雷公の子分が人間を打たうとしてゐる所の雲氣に龍頭がついてゐるが、これは雷が落ちるのは天が龍を取るのだ、といふ『論衡』龍虚篇に記される漢代の俗信と關係があらう。

次に圖26上を見てみよう。この圖の下左の部分に出てくる雷公については右に觸れたが、この雷公はただ歩いてゐるだけで攻撃的なそぶりは認められない。この畫面には他に雷公と密接な關係のある神神が出てくる。左下隅に立つのは雨師である。兩手に瓶を逆さに持ち、そこから水が流れ落ちる。畫面の下邊沿ひ、左半にうねうねと不規則な曲線をなすものは川ではなからうか。雨師の右上の坐像は何か不明。その右上には龜にまたがつた風伯がラッパ形の器をくはへて何かを吹き出してゐる。やはり風ではなからうか。とはいへ龜に乗つた風の神といふのは文献に残らないやうである。その左にも小型のラッパ形のもの捧げて立つ男がゐる。上に向けられたラッパ形のものからはやはり小規模な風(?)が吹き出てゐる。この神も何者か不

まい。

北斗のコ字形の凹みに、齒をむき出して怒つてゐる大きな男が坐つてゐる。長大な、裝飾的な紐に特徴がある進賢冠風の冠をかぶつてゐる。これは一應「帝」とも考へられる。『史記』天官書に

#### 斗爲帝車

と、即ち北斗は帝の乗る車だ、とされてゐるからである。帝の坐つてゐる下には雲氣の渦卷があり、「雲車」(二六九頁參照)の形をとつてゐる。然し、この圖をよくみると、これは別様に解釋した方がよいやうである。即ち、北斗に乗る人物の前には四人の男が並び、前の一人は中腰、後の一人は立膝、中の二人は立つ。一番前の一人は手をひろげて顔の高さにさし上げ、後の三人は拱手する。前の一人の前、地上には頭髮のさばけた人間の首が轉がつてゐる。これはどうもただ事ではない。中腰になり、手をひろげてさし上げるポーズは、圖17第二段で雷に打たれさうになつてうろたへる男に見られる(圖18第二段もさうらしいが石が缺けてあてよくわからない)。この男は疑ひもなく北斗に坐る神に向つて必死で助けを乞つてゐるのである。この帝は後漢時代刑神である太一の性格をもつた帝に見たてることも可能である。然し、この狀況は、福永光司教授の御教示によるのであるが、この北斗に乗る神を『眞誥』に記される北斗君の古い姿と見ることによつてよりよく説明されると思はれる。陶弘景の選とされ、六朝末までには今の形になつたと考へられる『眞誥』(卷一五)には死者の靈魂が行く羅酆山の記述がある。そこには死者の靈魂を管理し治める神のゐる六つの宮があるが、その第四は恬昭罪氣天宮と呼ばれ、鬼宮の北斗君がゐて、死者の生前の功罪の取調べをするといふ。さうすると、北斗に坐り、齒をむきだして怒つてゐるのは、前に坐つて助けを乞ふ身ぶりの男の生前の罪を取調べてゐる北斗君と見るのがよささうである。この男の前に置かれてゐる首は、この男が生前に犯した殺人の證據ではなからうか。漢時代に『眞誥』に記されるやうな北斗君についての文獻の記録はないやうだが、その原形がここに畫かれてゐるのだと考へられよう。

北斗君の後には耳のやうなものが二つ出た、仙人と同じ頭の侍者―翼がないので仙人とはいへない―が三人控へてゐる。北

斗君の下僚とみられる。手をさし上げて助けを乞ふ被髮の男の後に並ぶ者の頭も、髪が束になつて後になびく被髮である點、仙人と共通であるが、彼等にも翼がなく、仙人ではない。前引圖17第二段で雷に打たれようとする人達の頭も髪が逆立ち、冠は見當らないが、髪(80)の形は兩者共通してゐるといへよう。先にも引いたやうに筆者は鬼(81)が古代中國で被髮の形で表象されたことを證した。北斗君の前で助けを乞ふ男の後に控へる三人は、恐らく死者につきそふ北斗君の家來ではなからうかと思はれるが、『眞誥』に北斗君が「鬼官」と呼ばれるやうに、家來も鬼の姿をもつて畫かれてゐるのである。

北斗七星の右には鞭を片手に持ち、武冠をかぶつた導騎と、後につづく輶車があり、その後には帝の左にゐたのと同じなりの男が見える。この車は北斗君の指揮下のものに違ひない。地上に行つて死すべき人間を召し出す任務をもつたものではないかと想像される。北斗君の前に引き出された男はこの車で召し出されて來た、とみれば、畫面中におけるこの車の役割がよく説明される。

### (3) 雷公、風伯

地上の人間の命を召し上げる危険な神を畫いたものとして雷公の圖がある。圖17第二段と圖18第二段である。兩者相ひ近い圖柄をもつが、これらは現在同じ後石室畫像に分類されてゐるとはいへ、本來別の建造物に屬してゐたと考へられてゐる。(81)圖17から説明すると、左の端には口から扇形に風を吹き出す風伯が雲氣上に坐る。風伯の膝には小さい被髮の仙人がつかまり、頭の上には足が蛇尾狀になつた被髮の仙人がゐて、風伯の風と前にある鼓の飾りにつかまつてゐる。下に渦卷の並んでついた雲氣の上に乗つた板—圖18では舟形になつてゐる—の上には目のつり上つた男が坐り、その前後端に建てられた鼓を槌で打つ。この男の髪(82)の毛は生え際でくくつたやうな形で、くくつた紐の端が兩側に出てゐる。鼓のついた板は上下二列に並んだ五人の被髮の男が引綱を肩にかけて引く。彼等は雲氣の上を歩くが翼はない。この雲氣の上に載つた板乃至舟の上に坐る男は、その右方にゐる一群の雨、雷電等の神の大將株であることは疑ひない。雷公とみてよからう。雷公の中には圖26上にみるやうに、

うな神もあり、聲が雷でもつて畫かれるといふことは大いにありうることだからである。

これらの畫面の雲氣が雷鳴と見うると共に、これはやはり雲のやうなつもりで畫かれたものでもあつたのである。神神をはじめ、車を引く魚や龍などに足がかりを呈供してゐるからである。圖26、上下の畫面をにぎやかにしてゐる雲氣について認識を新たにした上でこれらの畫面をみると、雲の上に乗つた神神の大群が天の一方から一方へ移動してゆく雄大な情景に、當時の人人は殷殷たる雷鳴をも看取したことが知られる。

なほ右に引いた雷公の畫には風伯が出て來たが、圖18の雷公の畫のすぐ下の段には風伯が單獨に畫かれてゐる。右端に居り、頭は力士風に髪を一本の角狀に束ねる。束ねた髪のうち鱗狀の紋様がかきそへられてゐるのは髪をくくつた紐の端と思はれる。短い袴をつけ、中腰になつて口から風を吹き出す。風はそのまま雲、水蒸氣となつて「珍抱」と形容される形(二五六頁參照)で前方に向つてただよひ、この雲氣からはこれに乗るらしい龍、鳥、馬等が顔を出す。また風伯の股の下をくぐつてもう一本の雲氣が前のものと平行にのびる。これには主として鳥と足が蛇尾になつた被髪（被髪）の仙人が顔を出したり、手でつかまつたりしてゐる。

#### (4) 三苗の追放

次に圖17第三段をみてみよう。小林太市郎は籬の圖とし、中の圖像もその線に沿つて解釋してゐる。<sup>(90)</sup>果してさうであらうか。まづ圖像を點検してみよう。

右端にゐるのは大きな、目が縦についた人間形の怪物で、短い袴をつけ、片手で小さい人間を握り、足から喰ひにかかつてゐる。頭には耳のやうなものが出た冠をつけること、仙人やさきに見た北斗君の臣下達と同じである。その左にゐるのは先にも指摘したごとく天帝使者である。頭に弩をのせ、手に刀と手戟、足に鉤鏢と矛の先を持ち、右に向つて歩む。その腿に熊の

やうな動物がつかまつてゐる。その子分でもあらうか。三番目にゐるのは右端のものと同類の人間形の神である。頭のかぶり物、目の付き方、短い袴をつける所など同様であるが、背が高い。鉤鑲と刀を持ち、右方に突き進む。小林はこれを方相氏とし、熊の皮らしきものをかぶつた姿と説明する。然し頭は右に記述したごとくで、また方相氏の四目といふ大切な屬性が缺けてゐる。

これら鬼神の左には三人の人間がつづく。右の男は武冠をつけ、兵隊風の身なりをし、左手に魁、右手に盤を持つ。次の男は髪を結はず、左手に唾を振り上げ、右手に魁をかまへる。次の男は髪を逆立て、左手に碗、右手に唾を持つ。これら三人は目をむき、齒むいて大聲で叫んでゐるが、後の一人は恐怖のため髪が逆立ち、尻ごみ氣味である。彼等は壺や鉢の内容物をぶつかけ、唾でひつぱたかうといふのである。殺す氣でないことは持物から明かである。これらの男の持つ容器に入つてゐるものは何か。『韓非子』内儲説下に鬼キにたぶらかされた者が犬の小便或ひは蘭湯で浴するとよいといふ俗信が記される。怪物を逐ひはらふためにさういつた類をぶつかけようといふのに違ひない。

中央の三人の後には天帝使者の尻にくつついてゐたのと同じ動物が三匹ゐて、廻りにゐる人間のしぐさを眞似てゐる。一番前の動物の前には後半身が獣になつた人間形の鬼神が小さく表はされてゐる。その後をまた瓶をかついだ男一人、刀をもつた男二人が走つてゆく。みな幘を着けた身分の低い者である。

さてこの光景は雛の光景と見ることができであらうか。右端の鬼神はその名や屬性は明かでないが、これだけが左を向き、人間を食つてゐるから、これが左方の自分に向つて走つて來る者に敵對する立場にあることは確かである。また天帝使者の左の縦目の神がその後につづく人間達の味方であることもその姿勢からみて明かである。その間にゐる天帝使者はいかがであらうか。顔を手前に向け、その左にゐる者達に後から追ひ立てられ、そろそろ逃げようか、と體の向を變へた所のやうでもある。然し、これはやはり右端の怪物に立ち向ふ立場の者と見るべきであらう。天帝使者は前に引いた瓶の呪術的な文章で生きた人間の側に立ち、地下の世界の管理者達が死者の遺族に禍を及ぼさぬやうに話をつけ、また帶鉤にその姿が象られ、強い辟邪の



明だが、右方からやつて来る諸神を迎へてゐるやうである。風伯の右には笏を持つて坐る人間形の神と鳥が畫かれる。その下には象使ひの乗つた象。さきに圖7、9では象が南方に當る所に畫かれてゐた。この畫面の展開する世界も南方とみられさうである。中央より右寄りに、上下に雁行して三魚の引く車と三龍の引く車が畫かれる。前者は仙人が御し、頭に魚をのせた男が乗る。『御覽』八八二引魏文帝『列異傳』に度索君の廟に南海君が現れた話を記し、南海君が

着白布單衣高冠、冠似魚頭

と、即ち白い麻布のひとへを着て高冠をつけ、冠は魚頭に似てゐた、といふ。頭に魚をのせた神は或ひはこの南海君かも知れない。さうすると象の出現と土地の方角も合ふ。その右下、三龍を駕した車に乗り、太鼓の撥を持つのは、熊のやうな體恰好の神である。これは何者か不明。車には鼓が建てられ、その上に大げさな羽根飾りがつく。なほこれら二臺の車の車輪は蛇の卷いた形になつてゐる。かういふ車も物の本には出て來ないやうである。南海君の後には二人の男が立つて會話を交してゐる。傳説上の人物か神であらうが、何者か確かめる術がない。畫の登場人物を縫つて細長くうねつた雲氣が畫かれる。この畫は全體に神話的人物や神を色々出して來てパレードさせた、といふやうなもので、何かこれらの神神が一緒に何らかの行動をした、といふ物語の背景は讀みとりにくい。

圖26、下は左方が缺けてゐるが、圖26、上と近い寸法を持ち、同じ建造物に使はれた同類の畫像石である。左上には坐つて口から雲氣を吹出す神がゐる。頭には豚のやうな耳がつく。その右には三頭の虎の引く乗物があり、上で熊のやうな頭の神が力いつばい太鼓を打つてゐる。この車の御者は龜で、輿も二匹の龜の背に載つてゐる。この乗物の後にも龜がゐるが、この龜には蛇が交叉してゐる。するとこれは玄武で、ここは北方世界を表はしたことになる。玄武の背には太鼓が乗り、そこから雲氣が出てゐる。今の乗物の下には缺けた所が多いが、同様虎らしきものによつて引かれる乗物があり、やはり龜が御してゐる。これに乗る熊のやうな頭の神は手に葉をむしつた細い樹枝状のものを持つ。これも雷光のやうである。この電光の下に太鼓が半分見える。この神の後には人間の頭が三つ附いた虎のやうな有翼の動物がゐる。何の神か不明。これの下には鳥、その右に

は両手に瓶を持つた雨師がある。左側の瓶は傾けて水を流し、右側の瓶は上向に持つてゐる。雨師の上には鳥と四足の魚、その上には一角の虎のやうな動物——天祿、辟邪の類らしい——に乗る仙人が畫かれる。圖26、上下の二枚の畫が南と北の異なる方角に屬する神を畫いたものである可能性についてはさきに記した所であるが、雨師、雷鳴を出す神などが兩方の畫面に現れる。かういふ神は複數あるものと考へられてゐたことが知られる。

この畫面の左上に坐つて口から雲氣を出してゐる神がゐたが、この雲氣は雲か霧か、或ひはそれ以外のものか、何のつもりであらうか。雲氣といふものについてこの機會に少し考察しておかう。『論衡』雷虛篇に

禮曰、刻尊爲雷之形、一出入、一屈一伸、爲相校軫則鳴、校軫之狀、鬱律嶮壘之類也、此象類之矣、氣相校軫分裂、則隆隆之聲、校軫之音也、魄然若斃裂者、氣射之聲也、氣射中人、人則死矣

とある。即ち、禮の書のいふ「酒を入れる尊（ポウル）に彫刻して雷の形をつける。或ひは出、或ひは入り、或ひはちぢこまり、或ひはのび、互ひにねぢれて回轉するので音が出る」と。ここに校軫之狀といふのは「鬱律嶮壘」、即ち煙がうねうねと立ちのぼる形、木の幹が節だらけにぐねぐねする形、といったことである。校軫といった様はこれに類するのである。氣が互ひにねぢれて回轉すると分裂する。さうするところごとくいつた音がするのは氣がねぢれ、回轉する時の音である。バシツと物を割くやうな音がするのは氣が發射する時の音である。氣が發射して人にあたると人は死ぬ、と。

鬱律嶮壘といふ形は、丁度圖26に見るやうな雲氣の形そのものである。煙のやうにうねうねと回つてただよひ、所々に木の節のやうなものが出てゐる。これは校軫の狀で、雷を畫いたものだ、とみることもできる。圖26、下で玄武の背に載つた太鼓から雲氣が出てゐるのは、ごろごろといふ音のつもりとも見られる。同圖左上の雲氣を吹き出す神も、雷鳴の聲を出してゐると解釋することもできる。『述異記』に

先儒說、盤古泣爲江河、氣爲風、聲爲雷、目瞳爲電

と、即ち先儒はいふ、盤古が泣くと長江や黄河ができ、息は風となり、聲は雷鳴となり、ひとみは電光となる、といはれるや

力が期待されるなど、人間の味方でこそあれ、追放さるべき鬼魅の類ではないからである。この畫像では、天帝使者は食人鬼を逐ひ拂ふ一行の先頭に立つて人間のために働いてくれている所、と見るべきと思はれる。

これは具體的にいふと何の神話であらうか。『史記』五帝本紀に帝堯が舜の進言により共工、驩兜、三苗、鯀を北、南、西、東の四方に追放させたといふ傳説が記されてゐる。『正義』に『神異經』を引いて共工、驩兜ら四人の特徴を記してゐる。そのうちま問題の圖像と大體合致するのは三苗である。即ち

神異經曰、西荒中有人焉、面目手足皆人形、而胫下有翼、不能飛、爲人饕餮、淫逸無理、名曰苗民  
と、即ち、神異經にいふ、西荒中に人がゐて、面目や手足はみな人間と同じである。わきの下に翼があるが飛ぶことはできない。その人となりは大ぐらひで節度をふきまへず物事のすぢ道がわからない。名前を苗民といふ、といふのである。わきの下に翼がある、といふ點は合はないが、問題の圖像は人間の姿をして人間をむさぼり食ふ姿は「饕餮」(大ぐらひ)といふ屬性に合つてゐる。これが苗民、即ち三苗だとすると、天帝使者は帝堯の命を體してこれを追ひ拂はうとし、それに續く者共はこれに力を合せてゐる所だと解釋されよう。

なほ讎に天帝使者が加はるといふ話は聞かないし、また右端の逐はれてゐる鬼神も讎で逐はれることになつてゐる十二の鬼神の中に合致するものが見出されない所から、これが讎の光景でないことは明かである。<sup>(91)</sup>

## (5) 海 神

圖15は武氏後石室第一石である。上段は水の神と思はれる者の畫である。これと近いテーマは圖23の武氏祠のグループに屬するもう一枚の畫像石にも見出される。いづれも登場する鬼神の姿も變化に富み、興味を引く。圖15から見てゆかう。左邊に水があり魚が澤山そこから躍り出してゐる。その右に進賢冠の役人が立つてその前の車の出發を見送つてゐる。この見送りの男は魚が顔を出した雲氣の上に立つてゐる。車の中には進賢冠をつけ、便面を持つた男が坐る。車には四維と耳があり、後漢

の役人でいへば六百石以上の者の乗る車の格である。<sup>(92)</sup>車の前には三四の魚が並ぶが、これは車を引く役である。この魚の前に武冠の男が笏を持つて坐り、何かを言上してゐるごとくである。車も、これを引く魚も、魚が首を出す雲氣の上であり、今の武冠の男も同様なものの上に乗つてゐる。車を引く魚の上方及び斜め右下には武冠をかぶつて檠戟を肩にし、魚に乗つた男が各二人、計四人ゐる。後漢の役人の車馬行列でいへば騎吏に當る者である。役人だと騎吏四人といふのは公以下二千石に至る者の格式である。<sup>(93)</sup>

騎吏に當る者から右は車馬行列の編成になつてゐない。様様な武器を持ち、色色な姿をした兵士で、みな右方に向つて進撃してゐる。魚に乗り、刀と盾を持つ武冠の男、魚に乗る仙人風の被髮の男、同じ頭で刀と手戟を持つ男、矛や戟を持つ龜、刀と盾を持つ蟾蜍、刀と盾を持つ人足人手の魚及び胴と尾が魚になつた仙人風の被髮の男、盾だけを持つ魚など。中には武器を持たない魚、頭が動物になつた魚、鯰、鯰、手のある魚、龍などが混つてゐる。

次によく似たテーマの圖23を見てみよう。この圖では右に水があつてここから魚が躍り出てゐる。石がひどく傷んでゐるが、池の左に大ぶりの車があり、その左に四匹の魚がゐてこれを引く。車の主人は頭が仙人風の被髮になつてゐる。主人の車の前には導車があり、これを引く魚の尾が僅かに残る。導車に乗るのは御者とも仙人風の被髮の男である。主車を引く魚と導車の上下には、圖15に居たのと同様な、魚にまたがる騎吏が四人畫かれてゐる。この畫では更にこの左方に圖15右半にあつたやうな兵士がゐるかどうか明かでない。ここにはまた圖15にゐなかつた種類の鬼神がゐる。翼のある魚、獸頭有翼で蛇尾形の足が二本あるもの、仙人風の被髮で足が蛇尾になり、六枚の羽根のあるもの等である。

これらの畫は何を畫いたものであらうか。水の神といふとすぐに河伯が思ひ起される。河伯については『楚辭』九歌、河伯に

與汝游兮九河……駕兩龍兮騖螭

と、即ち汝と九河に遊ぶ……兩龍を服馬として繫駕し、螭を騖として繫駕する、とあり、計三四の龍に乗物を引かせてゐる。

また『山海經』、海内北經に

從極之淵深三百仞、維冰夷恆都也、冰夷人面、乘兩龍

と、即ち從極の淵は深さ三百仞あり、冰夷のつねの都である。馮夷は人間の顔を持ち、乗物に二匹の龍を繫駕する、といふ。郭注によると馮夷は河伯である。また注に冰夷は四面、即ち四つの顔を持つとある。四面は別としても、兎も角河伯は龍に乗物を引かせるとされる點で、今の畫と合はない。河伯でなければ何か。『史記』、始皇本紀に

始皇夢與海神戰、如人狀、問占夢博士、曰、水神不可見、以大魚蛟龍爲候

といふ。始皇帝は海神と戰ふ夢をみたが、その姿は人間のやうであつた。占夢博士にきいてみると、水神の姿は見られないものだ、大魚や蛟龍を斥候に出す、と答へた、といふのである。人間の姿を持ち、魚の化物の類を兵士として使ひ、戰鬪態勢を持った圖15の神は、始皇本紀にははれる海神に當ても矛盾がない。圖23の方は頭が仙人風の被髪になり、導車に乗る部下も同じ髪で、圖15よりも鬼神らしい姿を持つ。圖15と果して同一の神がどうか斷定できないが、假に同類とみておかう。

(6) 山 神

圖20は武氏祠南道旁畫像石で、やはり武氏の一群に屬するが所屬の石室が不明なものである。畫の構圖は圖23や15に近い。左方が缺けてゐるが、左の縁に車輪が見えるのが主車で、この畫面の主役の神が乗るものに違ひない。鹿が三頭繫駕されてゐる點でその右の一頭しか繫駕されてゐない導車と區別がある。これら導車と主車の上下には武冠を着けて棨戟を持つ騎吏が行列を作つてゐる。彼等が乗るのも鹿である。畫面に残るだけで七騎が數へられる。導車、騎吏の右には、ひらひらした飾りのついた矛をかつぎ、牡鹿や牝鹿に乗つた騎兵の一群が先導してゐる。それらの右方には龍、棒を持つて人立する動物、雉、猪、鹿、その他が行列と同方向に走り、下縁には漫頭形の山が、また中空には雲氣が畫かれてゐる。これらは鹿の引く車の行列に追ひたてられて逃げてゆく所と見られないこともないが、やはりこの畫面の主人公の神の配下で、行列の先驅をつとめる

者とみる方が自然である。圖15で海神の車を引く動物、騎吏の乗物などが魚づくめで、その手下が魚その他水生または水と縁の深い動物であつたのと同様、ここでも乗物に鹿を用ゐた神が、山獸たちを配下に使つてゐると見るのが自然だからである。鹿を繫駕した車に乗る神は、さきの海神の例から類推して、山神の類であることはほほ疑ひあるまい。

ただ山神といつても何といふ山の何といふ神かは確かめ難い。『山海經』、西山經に崑崙山を司る神として陸吾が出てくる。

崑崙之丘……神陸吾司之、其神狀虎身而九尾、人面而虎爪、是神也司天之九部及帝之囿時

と、即ち崑崙の丘は……神の陸吾が司る。この神の姿は虎身で九尾、人面で虎の爪を持つ。この神は天の九つの領域と帝の苑囿と祭祀の場所<sup>94</sup>を司る、といふ。天帝の苑囿を司るといふと、圖20で先驅をつとめる動物の中に龍の類が居る點の説明がつく。然しこの畫像では主人公の畫像が缺失してゐてここに記される所と合ふかどうか確かめえない。なほこの陸吾は郭璞の注によると『莊子』大宗師篇に大山(泰山)に居るとされる肩吾に當てられてゐる。

この神の行列には今残るだけでも騎吏が七人も數へられる。畫工が圖15、23などの海神よりも一段と大物の神を畫かうとしたことは明かである。ともあれ、これら海神、山神の威容を畫くに、人間の車馬行列の型式を採つてゐることは興味深い。墓室や祠堂に、死んだ人間の晴れの姿が車馬行列の形で畫かれたことは先に筆者の指摘した所である。<sup>95</sup>神の威容を繪畫に表現するに當つて漢代の人の思ひついたことは、車馬行列になぞらへ、鬼神をそのメンバーとした出行圖を畫くことだつたのである。三頭の鹿の引く乗物に乗つた神は圖25の右方にもゐる。尖りの三つ出た冠をかぶり、乗物は仙人が御する。或ひは右に記したのと同じ神かもしれない。後には仙人が鹿に乗つて従ふ。この畫像は圖26と同じ一群のものであるが、この神の乗物も圖26のものと同様、蛇の卷いた形の車輪がついてゐる。

この車を引く鹿の前には上下に並んだ何かの動物と龜がゐる。これらと車上の神との關係は明かでない。石の中央には何かの動物を象つた榻の上に坐り、几に馮る進賢冠の神がゐる。その左方にも人立する動物、坐つた人間、動物に乗る仙人、鳥、立つた二人の人間等が表はされてゐるが、すべて何物であるか明かでない。

(7) 昇天する神

武氏祠後石室畫像石には何かの神が龍その他に引かれる乗物に乗つて雲氣の中を進み、前方に出迎へが立つてゐる、といった圖柄が幾つかある。この類をここで検討してみよう。圖18第一段はその一つである。右端には風伯が中腰になつて口から風を吹き出す。この風伯は第三段に畫かれてゐるのと全く同じ神である。風を吹かせて左方の神や龍を吹き送ると同時に、彼等に足がかりとなる雲氣を供給する役を持つものである。その左方には角のない牛のやうな頭を持ち、二つに分れた蹄と太い尾を持つた動物に乗る仙人が上下に並んで走る。この動物は想像上の動物であるが、これに翼をつけたものがその左の神をのせた乗物を引く。これは應龍といはれたものではないかと考へられる。<sup>(96)</sup>この乗物の輿は漢代に使はれる輶車と同じであるが、車輪がなく、代りに渦卷狀の雲氣がつく。これは雲車とか雲雷車と呼ばれたものである。『淮南子』覽冥訓に

慮戲氏……乘雷車、服駕應龍驂青虬……游消搖、道鬼神登九天、朝帝於靈門

と、即ち慮戲氏は……雷車に乗り、服馬として應龍を繫駕し、驂馬として青虬を繫駕し……空中に浮んであちこちし、鬼神を導いて九天に登り、天帝に靈門のところでお目通りした、といふ。劉文典は『集解』にこの本文の「雷車」は「雲車」とか「雲雷之車」と書くテキストがあることに注意してゐる。雲氣と同じ表現のものを車輪代りにつけ、乗用の馬車と同じ車體をもつたこの乗物は雲車と呼ばれるにふさはしい。またさきに第(4)節に、節のついた木の幹のやうな表現の雲氣が、漢代に雷鳴をも表はしたことを證した。するとこの車は漢代に雷車と呼ばれたことも考へられる。ここの本文の雷車が雲車、雲雷之車とも書かれてゐるといふのは、必ずしもテキストの文字の寫し誤りでどれが正しくどれが誤りといふ問題とばかりは片附けられなさうである。どの名稱もこの車を正しくいひ表はしてゐるからである。

この車の蓋も雲氣になつてゐる。端に鳥頭がつくが、例へばこの畫像石の第三段にみるやうに、雲氣から鳥頭が出るのはよくあることである。この蓋は雲蓋と呼ばれたものに違ひない。『山海經』海外西經に

## 大樂之野、夏后啓……乘兩龍、雲蓋三層

と、即ち、大樂の野には夏后啓が……兩龍を繫駕し、雲蓋は三層になつてゐる、とある。この圖では雲蓋は一層であるが。

この雲車とこれを引く應龍の前には鱗のある龍がをり、その前には雲車の右にゐたのと同じものに乗つた仙人が二人、前後に並んで走る。一番左には通天冠をつけた身分のある男がこれを迎へてゐる。

ところで仙人の御するこの雲蓋の雲車に乗る者は誰か。車の後にこの神の尻がはみ出し、その下に何か垂れてゐる。人間が乗る場合だと、尻の下には履物をはいた足が出る所であるが、これは足でなく蛇のやうな尾である。するとこの神は人身蛇尾の神である。その姿の神で直ちに思ひ起されるのは伏犧、女媧であるが、この神の頭をみると男性だから、これは伏犧の方といふことになる。すると、この光景は前引『淮南子』に記される虚戲(伏犧)が天に登り、天帝にお目通りしたといふ話を畫いたものと見ることができさうである。伏犧の雲車に繫駕されてゐるのを應龍と見たのが正しいとすれば、この點でも『淮南子』の記す所と合ふことになる。伏犧の一行を出迎へてゐる者は普通の通天冠である點からみて天帝ではあるまい。然し、漢代畫像石で通天冠をつけて畫かれるのは諸侯級の人間である。漢人の感覺では、天帝の居所の戸口で出迎への役をするのだから、これぐらゐ高い地位の人でなければふさはしくないと考へられたものとみえる。

圖16の第一段と圖17の第一段にも、右に見たのと同様、通天冠の男が出迎へてゐる。いづれも龍を導、從にし、雲氣に乗つて昇天する神が畫かれてをり、兩者は恐らく同じテーマを畫いたものと思はれる。圖16から見てゆかう。右端には雲氣に足をかけた鱗と角のある龍——蛟龍と呼ばれたものと思はれる——が上下に並び、上に仙人が乗る。その前方には雲氣をへだててこの行列の主人が来る。有翼で雲氣の上に坐る。坐つてゐる所には特別の車輿のやうなものは見えず、雲氣に乗る、といふのが適切である。この神の頭の所はやや石がつぶれてゐるが、圖17上段の神と同じ頭ではないかと思はれる。長い頭髮を束ね、兩側にこれと平行に裝飾のある紐が沿はせてある形である。この神の左に仙人の御者がをり、前方に二匹の蛟龍がゐる。これ



がこの雲氣を引く者に違ひない。上の龍の角には被髪で足が蛇尾になつた仙人がつかまつてゐる。さらに前方にも仙人の乗る蛟龍が二匹、その前方には仙人の乗らない蛟龍二、乗る蛟龍一がうねうねした雲氣の上を走つてをり、間に仙人がゐる。これら一隊の到着先には通天冠の男が出迎へる。

圖17第一段の方は行列が左から右に進む。雲氣に乗る有翼の神の後には、雲氣の端の翼のやうなものにつかまる被髪の仙人がゐるが、龍はゐない。主人公の神の乗る雲氣は三匹の蛟龍が引く。この雲氣を仙人が御し、一番上の龍の角につかまる仙人がゐる點も圖16と共通する。その前に雲氣がわだかまり、被髪の仙人が乗つた蛟龍が二頭ゐる。この雲氣からは澤山の仙人が頭や體を出してゐる。その右には一匹の蛟龍が雲氣につかまつて立上り、更に右には被髪の仙人が乗つた蛟龍が二匹來る。通天冠の出迎への男の前には武冠をつけた男が跪いて拜してゐる。

これらの畫に出てくる神は誰か。これは十分明かにし難い。二匹の龍に乗物を引かせるといふと、先に二六六―七頁に引いた河伯がある。「蛟龍水居」といふから、蛟龍に乗物を引かせ、蛟龍を導、従とするこの神は河伯とみることができよう。また『莊子』逍遙遊には

藐姑射之山有神人居焉……乘雲氣御飛龍、而遊乎四海之外

と、即ち藐姑射の山に神人が住んでゐて……雲氣に乗り、飛龍を御して四海の外に遊ぶ、といふのである。雲氣に乗る、とあるのはこの畫像石の通りである。然し御するのが飛龍である所が合はない。また今問題の神の頭は仙人のものとは相違がある。他にも蛟龍二匹に雲氣を引かせて天に登つたといふ傳説のある神が文獻に残つてゐるかも知れないが、今のところ思ひつかない。これは假に河伯といふことにしておかう。

圖19第一段にはまた違つたメンバーの一隊が畫かれる。右端には雲蓋をつけた雲車に仙人が乗り、仙人が御してゐる。雲車を引くのは蹄のついた四本の足をもつた鳥頭蛇尾の動物である。その前には角のない牛の頭——牛はこの畫像石の第四段左端

のものを参照——偶蹄、蛇尾の動物が二頭、雲氣の上を走る。その左を走るのは蛇尾、有翼の馬といった所である。その左には龍が三匹をり、上の龍の頸には被髪（びはつ）の仙人がつかまつてゐる。この一隊の到着先には進賢冠（しんけんかん）をつけた男が出迎へる。この進賢冠は「屋」がひしやけて前に突出した特徴のあるものであるが、どういふ身分の者がかぶる物かはわからない。

この行列は前驅に各種の動物をそろへた所に特色がある。先頭の鱗のある龍は蛟龍と呼ばれたものである。『淮南子』墜形訓「介鱗生蛟龍」の高誘注に

蛟龍、有鱗甲之龍

と、即ち蛟龍とは鱗甲のある龍だ、といふ。後に圖45に畫かれた「黃龍」と題されるのも同じ類の龍である。すると、この先頭の龍も五色の内の一つの色名を冠して呼ばれる龍のつもりであるかも知れない。次に來るのは、翼と尾はその前後にある龍の類と同様で、頭や胴、四肢は馬そのものである。『淮南子』墜形訓に

毛犢生應龍、應龍生建馬、建馬生麒麟、麒麟生鹿獸、凡毛者生於庶獸

といふやうに、毛犢—應龍—建馬—麒麟—庶獸—けもの、といふ發生系統が記される。龍の特徴をそなへ、馬の特徴を濃厚にもつこの動物は、或ひは應龍から生れた建馬ではなからうか。これの次に來るものは先にみたやうに牛の特徴を持つ。この動物の頭は牛に似て角がない、といふと子牛（犢）である。すると、この動物は犢の特徴と龍の特徴を併せもつから、さきの建馬の場合と同様な推論で前引『淮南子』の記す毛犢がこれに當ることにならうか。淮南子のこの前後をみると

羽嘉—飛龍—鳳凰……

介鱗—蛟龍—鯢鯁……

介潭—先龍—玄龜……

といった型式で、みな二代目に龍と名のつくものが出て來てゐる。とすると、龍の特徴を既にもつてゐる今問題の圖像は毛犢から生れた應龍とした方がよささうに思はれる。確かではないが、假説として應龍に當てることにする。なほ應龍については

『淮南子』覽冥訓の前引の處戲が應龍に駕して天に登つた條の高誘注に、應龍を應德の龍と釋し、また一説、應龍、有翼之龍也

と、即ち一説に應龍とは有翼の龍だ、といふ。龍の類は大抵翼がある點、この説は不審である。また『淮南子』主術訓に

夫騰蛇游霧而動、應龍乘雲而舉、獲得木而捷、魚得水而驚

と、即ち騰蛇は霧の中をおよいで動き、應龍は雲に乗つて空中に上り、猿は木を得てすばしこく、魚は水を得てすばやいといふ。應龍は雲に乗らないと空中に上れないと考へられてゐたのである。圖19の今の圖像で、問題の動物は他のものよりも雲氣の足がかりの分量が多いのは、この考へに由るものと解釋される。

次に雲車を引く動物であるが、これは鳥頭獸身である。その類に飛廉がある。<sup>(10)</sup>然し文獻に記される飛廉の特徴はよくみるとこの畫像とは合致しない。『漢書』武帝紀、元封二年の條の注に晋灼の説を引き

身似鹿、頭如爵、有角而蛇尾、文如豹文

と、即ち、體は鹿に似、頭は爵のやうで角があり、蛇の尾を持つ。紋様は豹のやうだ、といふのである。爵は雀と同じであるが、これをスズメだとするとこの圖と合ふが、角がある、と記されるのと合はない。前引『淮南子』墜形訓「羽嘉生飛龍」の高誘注に

飛龍有翼

と、即ち飛龍は翼がある、といふ。鳥など空を飛ぶ動物の祖先とされる龍であるが、「有翼」といふのはさきに應龍のところ  
で記したやうに無意味な説明である。劉文典は『集解』にその條につき、『御覽』九一四所引には今引いた所が

蜚龍、龍之有羽者

と、即ち蜚(飛)龍は龍で羽毛のあるものだ、となつてゐると注意してゐる。これなら他の種類の龍と區別する目安になる。今問題の鳥頭獸身蛇尾の動物は飛龍と見ることができさうである。頭はその子孫たる鳥類の特徴を持ち、身體に細い平行線で表

はされた羽毛をつけてゐるからである。

これを飛龍とすれば、これを繫駕して空中を飛ぶ仙人は、さきに二七一頁に引いた『莊子』逍遙遊に記される藐姑射山の神人に當てうる可能性が生れる。飛龍を駕して空を飛んだ仙人の話は他にもあつたかもしれないが、名のないのも物足りないから、假に藐姑射山の神人としておかう。

圖19第三段も今まで見てきたのと大體似たやうな構圖をもつ。左端には蛟龍に乗り、旗をかついだ仙人が二人。その右には雲蓋の雲車があり、仙人が乗る。これを引くのは三匹の蛟龍である。その右には雲車の後にゐたのと同様な旗をかついだ仙人が四人先導する。右端には旗を押し立てた仙人が左を向いて雲氣の上に立ち、そのすぐ前には先頭の蛟龍を押し止めるしぐさで小型の仙人が坐つてゐる。

この行列は何であらうか。導、従及び出迎への仙人がみな旗を持つてゐる所に特色がある。當時の人間社會の車馬行列にも大編成のものと同じやうな旗をもつたメンバーの加はるものがある。<sup>(102)</sup>然し大編成のものでもそれのないものもある。どういふ區別があつたか明かでない。圖19のこの行列についても、これが何を畫いたかにつき、今のところこれといふ解釋の案を持たない。

圖22は右半と左半と畫面の天地の寸法に違ひがあるが、兩側から二枚合せた石の紋様で喰ひ違ひがあるのは、何層にもなつた外框の内側の一層だけで、他は合つてゐる。もともと一枚の畫であつたことは疑ひない。さて、右半は三頭の龍に引かれる雲車を中心とした空中遊行の圖である。先驅には有翼の獅子のやうなものに乗つた仙人が二人。雲車の後には有翼の何かの動物が六匹ゐて、そのうち三匹には人が乗り、二人は檠戟(?)をかつぐ。雲車に乗る者は御者も主人も、頭上に何か麒麟の肉角のやうなものが附く、獨特な姿をもつ。雲車は雲氣の上に乗る、車上には旗のやうなものがついた鼓が建てられてゐる。彼等の

到着先である左半は、圖11にもあつたやうな鬼神の群がる世界である。左方には大きく一對の鳳凰のやうな鳥と二匹の大きな魚が畫かれる。これで思ひ出されるのは『列子』湯問に

終髮之北有溟海者、天池也、有魚焉、其廣數千里、其長稱焉、其名爲鯤、有鳥焉、其名爲鵬、翼若垂天之雲、其體稱焉、世豈知有此物哉、大禹行而見之

と、即ち終髮といふ所の北に溟海といふ海がある。天の池である。ここに魚がゐて、その幅は數千里もあり、長さもこれに均合ふ程度ある。その名は鯤といふ。また鳥がゐてその名は鵬といふ。翼は天から垂れる雲のごとくで、その體もこれに均合ふ程度である。世の人はこのやうなものがあるのを誰も知らないが、大禹は行つてこれを見てきた、とある。この圖の巨きな魚は鯤、大きく畫かれた鳳凰は鵬に見たてることもできる。さうすると右方から雲車に乗つてやつて來る者は禹のつもりであるかも知れない。ただ、これが禹だといふ目印になるものは見出されないのであるが。

(8) その他の神話

圖19の第二段を見てみよう。右寄りに人身蛇尾の男女の神がゐて夫々規と矩を顔の前にさし出し、尾を絡ませてゐる。これが伏羲と女媧であることは改めていふまでもない。<sup>(10)</sup>女媧の傍には女の、伏羲の傍には男の仙人がゐて便面であふぎ、彼等の後にも仙人が寄つて來てゐる。男の仙人は足が二本の蛇尾となり、女の仙人は一本の蛇尾になつてゐる。この一群から左の方を見てゆくと、中央よりやや左に、肩から上の仙人が二人、夫々一方の翼をひろげて外側を向き、下の方が $\alpha$ を横にしたやうな形の尾——雲氣の渦紋がつく——になつた者がゐて、右方より二本の蛇尾形の足をよぢり合せた仙人、雲氣から體をのぞかせる仙人がこれに向つて寄つて來てゐる。更に左端には上から大きな一對の鳥頭が環状におほひかぶさる下に、向ひ合ふ仙人の頭があり、下が二本の蛇尾状になつたものがある。右側の方には更に二つの鳥頭が見え、雲氣の渦巻が所々についてゐる。このものにも右方から兩足が蛇尾になつた仙人が空中を泳いで寄つて來てゐる。

伏犧、女媧の左方にゐる、これら二人の仙人のくつつき合った像は一體何物であらうか。伏犧、女媧と並列し、これと同じやうに廻りから仙人が寄つて來てゐる所からみて、伏犧、女媧よりも昔にゐた、或ひは後に現れた傳説的な帝王ないし神ではないか、といふことも一應考へられる。然し、伏犧、女媧の前後の時代に、このやうに胴から上、ないし首が二つ附いた者は文獻の中に見出せない。また彼等の頭が仙人の頭になつてゐる點は、伏犧、女媧と同格の者たるにふさはしくない。また武氏後石室の第四石、五石とも、他の畫面はすべて一つの段に主役が一人しか現れない所からみて、右の想定は方向からして誤つてゐるやうである。

この段が單一の主役の物語を畫いたものとすれば、その主役は伏犧、女媧において他にあるまい。さうするとこれは何の物語か。『楚辭』天問「女媧有體、孰制匠之」の注に

傳言女媧人頭蛇身、一日七十化

と、即ち傳へられる所では女媧は人頭蛇身で、一日に七十化するといふ、とある。七十化といふと七十通りに姿を變へる、といふことにならうか。『説文』、女部に

媧、古之神聖女、化萬物者也

と、即ち媧は昔の神聖な女で、萬物を化した者だ、といふ。材料を變化させて萬物を作り上げた者だ、といふのである。するとさきの「一日七十化」は一日に七十通りのものを作り出した、といふことになるだらうか。さうではあるまい。『淮南子』、説林訓に

黃帝生陰陽(高誘注、黃帝古天神也、始造人之時、化生陰陽)、上駢生耳目、桑林生臂手(高注、上駢、桑林、皆神名、此女媧所以七十化也)(高注、女媧王天下者也、七十變造化、言造化治世、非一人之功也)

と。高誘の注によつて譯すると、黃帝は人間を創造する際男女の體の陰陽の部分を作つた。上駢といふ神は耳と目を作り、桑林といふ神は腕と手を作つた。そこで女媧は七十通りに姿を變つて人間の體の他の部分を作らねばならなかつたのである、と

この牛の出てくる話は何であらうか。『史記』秦本紀、文公二七年の條に「伐南山大梓豐大特」とあり、『集解』、『正義』には雍の南山にある大きな梓の木を伐ると大きな牛が飛び出して豊水中に入り、のちそこから時時現れたといふ傳説が引かれてゐる。<sup>(109)</sup>この牛は漢代にもよく知られてゐたものとみえ、『續漢書』、輿服志、下に皇后の謁廟の服に步搖の飾りとしてつける熊虎など六種の動物の一つとして「南山豐大特」が記されてゐる。<sup>(110)</sup>圖9の山中に大きな牛が一匹走つてゐる。步搖の飾りとしてはこのやうな形で用ゐられたものであらうか。とはいへ、圖19の畫像は南山の梓が畫かれてゐるわけでもなく、有翼の牛の走つてゆく先に川が畫かれてもゐない。或ひは全く別な話かも知れないが、大きな神牛が出てくるので引いた。

あと圖15の第二、第三段が残つたが、これは何を畫いたものかちよつとわかりにくい。まづ第二段の方。右から見てゆくと、右方は身分の低い女の群像である。右端に二人の女が臼を運びながらおしやべりをしてゐる。次の一人は片手を上にさし上げて天を仰ぐ。次にやはり女が一人、杵を兩手で持つて立ち、前に傾いた容器があつてその上方に雄雞と雌雞がゐる。容器が傾いて何かがこぼれたのを雞が食ひに來たので追ひ拂はうといふ所であらうか。その左方には男が出てくる。幘をつけた身分の低い男である。まづ何か曲つた器物をかついで左に向つて歩く男。次に子供を負つた女が坐つて何か木工をやつてゐる男に曲つたものを差出す。その左にも立つて斧をふるふ男。その左には二人の男が左に向つて歩く。そこには地上に置いた甕を挾んで二人の男が向ひ合ふ。左の男「さあ今度はおれの番だ」、右の男「いやもう一ぱい飲ませろ」といつたところである。全體にこれといった中心もない平和な庶民の日常生活の場面である。然しこれが神話傳説の光景の中に挟まつてゐるとなると、やはり同じ方向で解釋を試みる必要がある。平和な生活といへば堯舜の治であらう。右から三番目の女は天を仰ぎ、「これに就けば月のごとく、これを望めば雲のごとし」<sup>(111)</sup>と爲政者の徳をたたへてでもゐるのであらうか。大した證據もないが、假説としてこの光景は堯舜の治を畫いたものとしておく。

その下の第四段は、これは間違ひなく神話的世界を畫いたものである。この畫面は左から右へと展開する。左から四人目に通天冠の男が坐り、何か礎石の上に立つた短い柱のやうなものに手をかける。その左に仙人風被髮の男が跪いて手をさし出し、その後の同じ身なりの男も前かがみになって片手を前に出す。左端にももう一人が立つが、石が缺けて殆んど見えない。坐つた通天冠の男の頭の前と後の空中には仙人が飛んでゐる。この通天冠の男は仙人風被髮の男達に、兩手をかけた短い柱のやうなものを授與する所でもあらうか。仙人風の被髮をして仙人らしい翼を持たない姿は、圖18の北斗君の前に召し出された人間に見出される。兎も角現世の人間の姿ではない。石が缺けてゐるせいもあつて、どういふ話であるのか明かにし難い。

通天冠の男の右には二人が右を向いて立ち、體をかがめてその前方に並ぶ者達を見送る。その右には「屋」が前方に突出した特色のある進賢冠の類をかぶつた男が二人、片手をつなぎ、片手をさし上げてゐる。翼があり、裳が二段になつてゐる。その右には耜を持ち、長い皮弁のやうなものをかぶつた者が二人ゐる。翼を各四枚づつ附け、三段になつた裳を着用する。その右には笠をかぶつた者が二人、手をつないでゐる。これも翼を四枚持ち、裳は二段になつてゐる。右端にはこれらの一行の到着を迎へて進賢冠の男が前かがみになつて立つ、といつた所である。この光景は恐らく左方の通天冠の男を中心とする光景と話のつながりがあると豫想されるが、どういふ關係があるか明かでない。

これらは翼を持つ點からみて、勿論普通の人間ではない。右方の笠をかぶり、二段になつた裳をつけた姿は武梁祠の夏禹の姿と共通する<sup>(12)</sup>。ただし夏禹には翼がなく、耜を手を持つ。その左の耜を持つ者の三段の裳は同畫像石の黄帝、帝嚳、帝堯の圖像に見るものである<sup>(13)</sup>。その左の、「屋」の前方に突出した進賢冠風の冠は、圖19第一段左端にも見る所である。以上の比較から、これらが何か太古の物語を畫いたものであることは確かと思はれるが、誰の物語を畫いたものか、今のところ思ひ當らな

い。

以上この章においては一つ一つの神話を主題とした畫を取扱ひ、それが何の物語を畫いたものであるかを推測した。中には



いふことである。女媧が一日に七十回姿を變へたことは『山海經』大荒西經「有神十人、名曰女媧之腸……」の郭璞注に

女媧古神女而帝者、人面蛇身、一日中七十變、其腸化爲此神

と、即ち、女媧は古への神女で帝となつた者である。人面蛇身で一日のうちに七十回姿を變へる。其の腸が化してこの神となつたのである、といふ。また『藝文類聚』一一所引の曹植、女媧讚に

二皇人首虵形、神化七十、何德之靈

と、即ち二皇(伏犧、女媧)<sup>(10)</sup>は人首で蛇の姿を持ち、神化すること七十たびであるのは、どうやうな徳の不思議な力によるのだから、といふのである。七十化するのは女媧ばかりでなく、つれ合ひの伏犧も一緒だと考へられたことが知られる。かうみると、伏犧、女媧の左に畫かれた、多少ともこれと同様一對が合體した型式をもつ圖像は、彼等の七十化の様を畫いたものと見てよいのではあるまいか。

圖24は徐州洪樓地區で收集された一群の畫像石の一つで、大きさの點からみて圖25と對になつたものである蓋然性が大きい。中央左寄りに腕まくりをした大男が足を踏張つて一握り程の太さの立木を引抜かうとし、尻尾を肩にかけて牛をかつぐ大男がこれに向つて歩み寄り、いかつい顔で話を交してゐる。牛をかつぐ大男の後には鼎をかぶる男、小鹿をかかへる男、扁壺のやうなものをかかへる男がつづく。左手の方は虎に横乗りした男と盾をかまへ、刀を振り上げてこれに向つてゆく小男がある。虎に乗る男は笑つて素手でこれを拂ひ除けようとするがごとくである。この左端の男は豪傑の群像中の道化役といつた所である。右端の扁壺をかかへる男も或ひは同様な役の者ではなからうか。

同じテーマの畫像は圖17第四段にも見える。中央の木を引抜かうとする男、その右に虎をかつぐ男がゐて、後方の牛をかついだ男と二人で虎の前肢と後肢を片方ずつ持つて提げてゐる。木の左方には雄牛の尾を捕へる男と、この牛に向つて手を振り上げる男がをり、その下には小牛の後足を持上げる男がゐる。左端には巨大な動物におびえて逃げ腰になつた男が畫かれる。

これも圖24左端にゐたやうな道化役とみられよう。右端には幘を着けた騎者がゐる。その役割ははかりかねる。

これらが何か豪傑を畫いたものであることは疑ひないが、彼等の素性は何であらうか。一見現實世界の力士達ともみられる。さういふ力持ちについて『文選』にのせる班固の西都賦に田獵を描寫して

許少施巧、秦成力折、倚僂狡扼猛噬、脫角挫脰、徒搏獨殺……

といふ。即ち、許少(人名)は巧みな仕掛を用ゐ、秦成(人名)は力まかせにとりひしぐ。すばしい奴は後から捕へて引ずり、ただけしく咬みついてくる奴は手で引摑む。角を引抜き、頸を折り、空手で打ちすゑ、助大刀なしで殺してしまふ……、いふのである。今問題の畫像はここに記される力士の仕業とよく合致してゐるのが多い。

然し圖24で虎に横乗りするなどは現實離れしてゐるし、圖17では左端に怪物がゐる。<sup>(106)</sup>圖24が25の神話的光景を畫いた石と對になつたものであるらしく、また圖17もみな神話的光景を表はした三段の圖像の下につづく第四段目である點、これらも神話的光景を描いたものではないかと考へしめるものである。そして、このやうな群像ではないが、木を引抜く力士の姿は、圖5の八角檠天柱の北面に見出されるのである。圖24、圖17第四段はすると、中國の北方の世界に住む傳説的な豪傑の姿を畫いたものといふことになる。中國の神話傳説の世界で豪傑で狩をして廻つた者といへば羿が有名だが、羿なら弓矢を持つてゐなければならぬ。<sup>(107)</sup>夏の傳説にまた寒促の子の澆がゐる力が強かつたとされる。<sup>(108)</sup>とはいへ、特に今問題の一群の力士に結びつける手がかりもない。この圖像の話の主人公たちの固有名詞は今のところ探し出すことができない。

次に圖19第四段を見てみよう。この畫の主役は一番左端に走つてゐる翼のある牛である。この牛を、體の下の方が雲氣の渦紋のついた蛇尾になつた仙人、龍、鳥などが追ひかけ、右の方には翼の生えた人間や仙人が見送つてゐる。この見送る四人のうち、左端の者は頭が仙人で、前には雲氣のついた蛇尾が出てゐる。右端の皮弁の男には翼があつたかどうか拓本では判定できないが、他の仲間からの類推であつたとしてよささうである。

確實性の相當高いものもあれば、證據らしいものも全く不十分で、假にさうしておくといふやうなものに至るまで、種種の段階のものを含む。然し、これらの畫は、例證として引いた文獻に残る話の類を知つてゐる畫工によつて畫かれたものであり、また文獻に残る文章や詩句を書いた人人は、かういふ類の畫も見知つてゐたに違ひない。ここに扱つたやうな神話傳説世界のテーマは漢人の強い願望をこめた想像力によつて育てられ、様様な型式をもつて客觀化され、くり返し用ゐられたものであるが、これらの繪畫的表現が漢代の人人のかうした事象に對するイメージを知る上の有力な手がかりを呈供するものであることは確かである。

この章に引いたこの手の圖像は、圖21 22 以外はみな墓に附屬する祠堂に表はされたものであることは注目に價する。<sup>(14)</sup>これらは、ここに畫かれた鬼神の類を死者の世界に畫像の形で移すといふより、生者が觀、觀る者がその世界について認識し、そこに想像を馳せ、——楚辭の天問が王逸のいふごとく先王の廟や公卿の祠堂の壁畫に着想をえたものとすれば、それはこの類の畫像に違ひない——自らをそこに移入することに主たる制作意圖があつたのではないかと思はれる。この點、第一—三章に扱つたものと大きな相違がありさうである。

#### (9) 裝飾モチーフとなつた神話的光景

前節までで扱つたのは、一つ一つの神話的光景が一枚の繪として畫かれた類であるが、ここにはそれを簡略に畫いたものが裝飾モチーフの一つとして他のものと組合せて用ゐられ、その組合せに鬼神の世界についての秩序、乃至は神話にその根據が見出せない類である。

圖30に引いたのはフリア美術館藏の獸帶鏡で、珍しい圖柄のものである。獸帶鏡といふと通常四葉座の間に四神、それに伴ふ仙人や瑞獸を一體づつ納れるものであるが、ここに見るものは大分違ひがある。下中央に仙人が向ひ合つて六博を行ひ、兩側に「赤誦馬」、「王喬馬」と題された馬が止つて飼葉槽から飼を食つてゐる。この二人の仙人が赤誦(松)と王喬の二人であ

ることは疑ひない。赤誦馬と辟邪の間の二こまが崑崙山の「銅柱」であることは先に記した所である。これらは夫々獨立したテーマで、特別な神話的つながりも、またそれらが存在すると信ぜられた世界の中における位置の對應も認められない。

圖29は東急美術館藏のものであるが、これも珍しい例である。眞下に見るのは二頭の龍の引く雲車に乗った神である。仙人が御してゐる。その右は藥を搗く兔、その次は琴を弾く男で、恐らく伯牙であらう、次の二こまは何かの草をさし出す仙人と正體不明の動物。龍のやうな長い頭に同じく龍のやうな角がつき、ずんぐりした體に長い尾といった特徴をもった動物は圖27左の下邊にもゐる。この鏡紋でもこれと同様、前に何かの植物が畫かれてゐる。次は鏽に侵蝕されて幾分不明瞭な所があるが、仰向に轉がつた鼻の長い動物に虎が戯れる圖。その下は何かの草を手を持つて麒麟に乗る仙人と鳥。これら四葉座の間に入れたテーマは、麒麟のやうに、次章に記す祥瑞として解することが可能なものも混るが、大部分は神話的光景の簡略な表現と見るべきもので、それが互ひに脈絡なしに間配られてゐると見られる。

圖28はフリア美術館藏の鏡の主文で、乳をへだてにして四つの畫像が飾られる。下は雲氣の上に坐つた皮弁の神が二頭の龍にこれを引かせ、旌を後になびかせて空中をゆく圖。右及び上方にはよく似た姿の神が夫々二頭の虎、二羽の鳥に雲氣を引かせてゐる。左は牛とこれに戯れる名稱不明の動物——時に所謂方格規矩四神鏡の中に祥瑞動物として見かける奴。これら龍、虎、鳥に自分の乗つた雲氣を引かせる神はいづれも名と何かの物語をもつたものに違ひないが、それについては一切明かでない。

圖27は銅山縣小李村首山漢墓の畫像石で、前室前壁の入口の東側と西側に飾られたものである。東側に當る圖27右に三足鳥の入つた太陽を、西側に當る同圖左に兎と蟾蜍の入つた月を表はすところから、これらの畫像は全體に東西の方角に對應した鬼神類が畫かれてゐるのではないかと豫想される。事實、圖27右の上部にゐる風神が、沂南畫像石墓前室東壁南段の畫像中に見出され、大體の方角が對應してゐることは先に指摘した所である。然し、兩圖に畫かれた圖像が、すべて東西の方角に屬するものかどうか、さう十分に確かなわけではない。圖27左の上部に笠をかぶり、耜を手にした男がある。これは神農ではない

かと思はれる。農民の姿で表はされた神農の像は武梁祠畫像石に見られる。<sup>(115)</sup> またこれがただの農民でないことは、多りに波形の飾りのついた帔をつけることによつても知られる。<sup>(116)</sup> ところで神農が西方に配される理由といふのはちよつと思ひつかない。この一對の畫像を第三章で扱はず、ここに持つてきたのはこのためである。然し、これらの畫像のうちで、右に觸れた以外の鬼神についてはどの方角の世界に屬するか現在知られてゐないので、それが追追わかつて來た曉に、やはり第三章に扱ふべきであることが明かになるかも知れない。

## 五 祥 瑞

漢代の鬼神の圖の中には祥瑞といふジャンルがある。『論衡』、指瑞篇に「儒者説く、鳳凰麒麟は王者のために來る、と」といふやうに、王など爲政者にこれこれの徳があるとこれこれの鬼神や動植物、品物が出現する、といふ信仰である。それが現れるのは必ずしも王者の徳が高い時ばかりでなく、自然の運行を司る高い地位の神の働きがあらたかな場合にもそのもとに出現すると信ぜられたことは先に筆者が注目した通りである。<sup>(117)</sup> 圖45は建寧三年（一七二）に作られた李翁碑に畫かれた祥瑞圖で、畫の横に書き記されたやうな由來のものである。李氏の徳によつてこんな祥瑞が現れたといふのだが、かういふ偽善的な形で祥瑞の圖が畫かれることは例外的である。多く見るのは通常以下に記すやうな型式をとつたものである。

### (1) 武氏祠の破風内壁

圖31は嘉祥縣武梁の祠堂の畫像石で、南向に開いた板石造り切妻の祠堂の東西壁、破風内側に當る所の圖である。<sup>(118)</sup> 圖31上が東壁、同圖下が西壁で、東西相呼應して夫々中央に東王公と西王母の圖像がある。圖32も前石室の同様な位置の畫像で、同圖上は東王公、下は西王母で、同じ關係位置に復原されてゐる。<sup>(119)</sup> 圖33 34は右の他に圖像のはつきりしてゐるものを武氏左右室、

後石室から拾つたもので、本来對になつてゐたものではない。

ここに見るのは、西王母及び東王公を中心に、その左右から鬼神が求心的に集合した形である。圖12で、夫々の棲み家である山に納まつてゐた鬼神が、その居場所を捨てて群がってきた、といふ趣向とも見える。果してさうであるか、まづ手始めに各圖の構成を見ておかう。

圖31上の中央にゐるのは東王公である。榻の上に坐り、頭に通天冠をつけ、肩には帔(120)をかける。肩からは翼が出てゐる。東王公の上には裳をつけた大きな鳥がおほひかぶさり、すぐ右には仙人が坐つてコップを差し出してゐる。この仙人の右には双仙人首の動物がゐる。その右は仙人首、人手をもつた蟾蜍。一番右はこの石祠の祥瑞圖(圖47)にも出てくる比翼鳥である。東王公の左には龍首人身蛇尾で四枚の羽根のついた動物が空中から東王公の耳に口をよせる。地上には仙人が立つて串刺しの團子を差出してゐる。<sup>(121)</sup>その左には双頭の龍がをり、後の空中に仙人がゐて一方の頭を引張る。その左は前後に双人頭のついた四足の鬼神がゐて、その背上に小さい仙人が乗つて兩手をのぼし、人頭を引張つてゐる。一番左にゐるのは足が蛇尾になつた仙人の類。

圖31下は同圖上と對をなす畫像で、中央に幪をかぶつた西王母が榻の上に坐る。榻の兩側には龍と虎の上半身がのぞいてゐる。鏡紋とか四川畫像塼などの西王母の圖によく見かける表現である。<sup>(122)</sup>西王母の右には三人の女性の仙人——幪をつける——が西王母に向つて手をさし出す。下の一人は何かを捧げてゐるやうである。その右には藥を搗く一對の兔。白は横になつた蟾蜍によつて支へられてゐる。右の兔の前の地上には何かが立つてゐる。兔の右は蟾蜍、右端には鳥がゐる。蟾蜍と兔の間に小圓があり、何かの天體を表はすと思はれる。西王母の左には二人の女性の仙人がをり、上の一人は空中から串刺しの團子をさし出し、下の一人は虎の前肢を握つてゐる。その左には龍。仙人と、兩足が蛇尾になつた仙人形鬼神が龍につかまり、その後には通天冠をつけた人頭の鳥がゐて何か草のやうなものをさし出す。

圖32上の東王公の身なりは圖31上と同様だが、右手を胸の前にあげ、左手を榻についたポーズは獨特である。榻は龍と、兩

足が蛇尾になつた仙人とによつて支へられてゐる。東王公の右に仙人が立ち、何かをさし出すが、上が缺けてゐてさし出す物は不明。仙人の後には上下に二頭の龍がゐる。下の龍は體の下が渦紋狀の雲氣になつてゐる。圖32の圖には他にも鬼神の身體の一部が雲氣に化した表現が多い。下の龍の後に蟾蜍が横になり、前、後肢に腰から下が蛇尾になつた仙人を支へる。前者は二本の蛇尾、後の者は一本の蛇尾といふ差がある。蟾蜍の右には双仙人頭、有翼蛇尾の鬼神、右端には上體が蟾蜍で蛇尾、二枚の羽根をもつた鬼神が飛ぶ。東王公の左には小型の仙人が碗を差出す。その下の兩足が蛇尾になつた仙人は圖31下左端の人頭鳥身の神の持つてゐたのと同じ草のやうなものをさし出す。その左上に大きな雉のやうな鳥がをり、人間の手が一本ついてやはり何かをさし出してゐる。その足は兩足が蛇尾になつた仙人によつて支へられてゐる。これの片足には雲氣から上半身を出した仙人がつかまつてゐる。その左は、右半にもゐた双仙人頭有翼蛇尾の鬼神。その左は三首の鳥。左隅には小さい鳥がゐる。<sup>(123)</sup>

圖32下の中央の神は上體が缺失するが、當然西王母である。圖31下で榻の下から顔を出してゐた龍虎の下半身が、ここでは龍尾となつて絡まり、榻を支へてゐる。榻の右から體を持ち上げた虎は前肢に仙人を支へる。この仙人は何かを西王母にさし出すらしい。その右上には二枚の羽根と蛇尾のついた鬼神の残片がみえる。その右は鳥身人頭人手の鬼神が、草のやうなものをさし出す。この鬼神の下には龍がをり、その後には蟾蜍、その下に兩足が蛇尾になつた仙人。右端は馬のやうな頭をもつた鬼神である。西王母のすぐ左には裳と足が残る。仙人のものらしい。その左には藥を搗く兔。白は蟾蜍によつて支へられ、搗藥の光景全體は鳥頭のついた雲氣にまともられてゐる。その左は雲氣によつて結合された一對の仙人頭鬼神で、兩者の後からは蛇尾が出てゐる。圖19に見た伏羲女媧七十化の圖にみるものに近い。その左には大きな鳥がをり、頸には一本の蛇尾をもつ仙人がつかまり、下には大きななどぜうのやうな魚が横たはる。左端は雉のやうな鳥。

圖33は東王公を中心とする光景。この東王公は帔を着用せず、翼は肩の前に附いてゐる。右上方からは、足が二本及び一本の蛇尾になつた二人の仙人がつかまり、下に二人の仙人がゐて、前の仙人は卮を差出す。仙人の右には上下に鳥頭のついた雲

氣があり、その上に大きな雉のやうな鳥が乗る。その尾の下に双仙人頭四足獸形の鬼神がゐて左の雲氣につかまる。またこの鬼神の肩には仙人がつかまつて空中を泳ぐ。この仙人の足の下には進賢冠をつけた双仙人頭四足獸形の鬼神がゐて、その背中に仙人が立つ。この仙人の上空には鳥がある。その右は前後に頸のついた双仙人頭四足の鬼神がゐて、胴の下には鳥がうづくまゐる。その背にも仙人が乗り、双つの仙人の頭を引張つてゐる。その右には兩足が蛇尾になつた仙人、右端には鳥がある。東王公の頭上には翼と人の手をもつた蟾蜍が飛び、その左手にももう一匹同様なものがつづく。この二匹の下に雲氣に鳥頭と蛇尾のついた鬼神が飛んでゐる。その下には前後に並んで二人の仙人がをり、右の一人は串刺しの團子をさし出してゐる。仙人の後には人身有翼馬頭、および雞頭の鬼神が笏を持つて坐る。雞頭人身の神としては天寶といふものが知られる。<sup>(註)</sup>馬頭人身の神の上には兩足が蛇尾になつた仙人がをり、その左上には雲氣に鳥頭と蛇尾のついた鬼神がみえる。左端に近い所には通天冠をつけた人頭鳥身の神がゐて人間の手を持ち、草のやうなものをさし出してゐる。左端は仙人の上半身である。

圖34はまた33とは對にならないうち後石室の一群中の石である。中央に坐るのは頭上に鬨が見えることから知られるやうに西王母である。頭上に雲氣が蟠り、その右端から雌鹿のやうな動物の前半身がのぞく。この雲氣の上を龍が跳ぶ。西王母の右には仙人が坐つて串刺しの團子をさし出す。その上には鳥首の雲氣があり、その右にこれに前肢をかけた龍がある。この龍の後半身の下にも雲氣がうねつてをり、その後端にも鳥首がつく。この雲氣を支へるやうなしぐさで立つた、足が蛇尾になつた仙人と坐つた仙人が見える。その右には藥を搗く兔がをり、その右に仙人がゐて、更にその右にも何者かの足が残る。西王母の頭上の龍の角には兩足が蛇尾になつた仙人がつかまり、同種の仙人がもう一人、龍の前肢につかまつてゐる。西王母の左に仙人が立つて片手で翼につかまり、片手で何かをさし出す。その左にも仙人がゐて片手でこれにつかまり、片手で上の雲氣を支へる。この雲氣には鳥首と尾がつき、上に龍が乗る。その左には桶のやうな容器を中心に三人の仙人がある。左の仙人は中身を杓でくんで上方の仙人に渡してゐるやうである。この仙人の左上には何かの動物が立ち上り、片足を雲氣の渦巻にかけてゐる。その下に仙人が匍つてゐる。その左は人頭鳥身人手の神。更に左に四足獸、何かの翼、翼と尾が残る。



ざつとこのやうに見て氣がつくことは次のことである。即ち、西王母や東王公の兩脇に侍つて串刺しの團子やコップに入れた飲物をさし出す侍者風の仙人、西王母につきものの藥をつく兎などを別にして、例へば通天冠を着けた人頭鳥身の神は、圖31下の西王母の所にも、圖33の東王公の所にも現れるのはどうしたことか。雉のやうな大きな鳥も圖32下の西王母の所にも、圖33の東王公の所にもある。蟾蜍も圖31下の西王母の所、圖32上の東王公の所にも出てくる。またここに引いた例では圖31上、33など、東王公の所にしか出てこないが、この類の圖で双人頭四足獸は西王母の所にも現れる。また孝堂山石室では東西壁の中間にある三角形の梁に畫かれ(圖13下)東方、西方の世界に本來屬する鬼神でないことが知られる。かういふことがあるとなれば、例へば圖12に見たやうな、西王母のゐる崑崙山を中心として各山に分散してゐた鬼神が、棲み家をすてて西王母の廻りに參集した光景だとする解釋は棄てなければならぬ。するとどういふことになるか。

さきに筆者は漢鏡の圖柄について考察した際、所謂方格規矩四神鏡に出てくる四神に隨伴して表はされる動物が、本來青龍、朱雀、白虎、玄武の四種の動物形に表象された天の四方の星座とはもともと關係のないもので、それらの四神の正常な働きに應じて天上に出現した祥瑞を畫いたものであると解釋した。今ここに取扱つた、石室の破風内壁に畫かれた西王母、東王公の像を中心に群がった鬼神の中にも、本來的に兩神に伴ふものの他に、その正常な働きに應じてそこに現れた祥瑞の意味合ひのものがあると見て始めて、西王母東王公のどちらの所にも出現する鬼神のある事實が解釋されると考へる。西王母、東王公が世界の兩極に鎮座し、人間の壽命を増益する使命をめたく果してゐるので、そこに祥瑞の鬼神が現れた、日出度い日出度い、といふやうな畫だといふことになる。

(2) 徐州十里鋪の畫像石

圖35は徐州十里鋪の畫像石墓の前室横額背面と中室横額である。といふことは、兩畫像石は前室の中から見れば、入口の上

と中室への通路の上に相對してゐたわけである。いづれも中央と兩端近くに木を配し、その中間に動物や鬼神の像を入れる、といふ構圖になつてゐる。行論の便宜上、同圖下から見てゆくと、右側に大きな鳥がゐて雲氣の上にとまる。三つに枝分れした冠羽と長い尾羽根に特徴がある。鳳凰の類である。前にはこれに向つて手をさし出す仙人がをり、鳳凰の上空には人間が飛び、その後に比翼の鳥がつづく。下にも長い冠羽の鳥がゐる。中央の木の左にゐるのは有翼の獸身に人頭がついた鬼神で、その頭の上には更に八つの人頭が出てゐる。これは昆侖にゐるといはれる開明獸と思はれる。『山海經』、海内西經に

開明獸、身大類虎、而九首皆人面、東嚮立昆侖上

と、即ち、開明獸は體の大きさは虎ぐらゐで、九つ頭があり、みな人面をもつ。東に向つて昆侖の上に立つてゐる、といふものである。これが開明獸とすると、さきの鳳凰はさきに二四九頁に引いた、昆侖にゐる鶉鳥といふ鳳凰といふことになる。開明獸の前に人間の上半身を二つつけた四足獸形の鬼神がゐる。前節で注意したやうに、西王母、東王公などの所に祥瑞として現れるものである。ここを昆侖とすると、ここに珍しい樹木が畫かれ、後引の圖40で祥瑞の動物の廻りに動物が集つてたはむれるやうに、この木の下に動物が集つてきてゐることも解釋がつく。即ち、前引海内西經のつづきに

開明北有視肉珠樹、文玉樹、玕琪樹、不死樹……又有離朱木、禾柏樹、甘水、聖木、曼兌、一曰挺木牙交

といふやうに、珍しい、財寶でできた木、また貴重な藥になる木があるといふ傳説があるのである。そのどれに當るかわからないが、ここに畫かれたのはこの類の木と思はれる。前に記したごとく墓室中で圖35下とあひ對する同圖上も同圖下の世界のつづきのごとくである。左方には尾を絡み合せた一對の動物がゐる。この世界に住むとされたものか、或ひはこの世界に現れた祥瑞かは不明である。

以上のごとくであるすると、圖35には山の表現はなく、また西王母もゐないが、細長いパネルの中に昆侖山の光景を、そこに生える珍しい樹木と鬼神と、そこに集つて來た祥瑞をもつて畫いたもの、とみることができよう。

(3) 徐州睢寧等の畫像石

徐州ないしその近邊から出土する畫像石には、帶狀の、或ひは長方形のスペースに、衆くの鳥や獸、鳳凰、龍の類が並び、或ひは入り亂れて様様な姿勢をとり、或ひは踊るやうな圖柄が多い。これらもやはり祥瑞の出現した所を畫いたと見るべきものが多數を占めてゐるやうである。若干例を引いて説明しよう。

圖36は睢寧、賈汪地區から集められた畫像石の内の二つである。彫刻技法、縁飾りなどからみて、同じ建造物に屬するものと考へられる。圖36は中央に一對の麒麟と、その中間に立つてこれに飼を與へるやうなしぐさをする仙人がある。麒麟は『御覽』八九〇引の『春秋感精符』に

麟……王者不刳胎、不破卵則出郊

と、即ち麟は王者が孕んだ動物の腹を割いたり卵を割つたりしないと郊に出てくる、とか

王者徳化旁流四表、則麒麟游其囿

と、即ち王者の徳化がひろく世界の果まで及ぶと麒麟がその苑囿に遊ぶ、といつたやうなものとされる。畫像では兩側に頸と胴の長い四足獸——二九〇頁に記すやうに、虬龍の類ではないかと思はれる——が集り、思ひ思ひの姿でくつろいでゐる。

圖37は中央が缺けてゐるが、體の後部と冠羽の殘片からここに鳳凰が向ひ合つてゐることが知られる。鳳凰についてはいふまでもないが、一つだけ引くと、『説文』に

鳳、神鳥也……見則天下大安寧、朋、古文鳳、象形、鳳飛、群鳥從以萬數、故以爲朋黨字

と、即ち、鳳は神鳥である。……現れると天下は大いに安寧である。朋は古文の鳳の字で象形である。鳳が飛ぶと群鳥が何萬とついでゆく。故に朋を朋黨の意味に使ふ、といふのである。圖では右方にも向ひ合つて頸を上には伸す鳥、その他三羽の鳥、中央の鳳凰のすぐ左にも鳥と仙人、左端には鳳凰の銜へる連珠を手で承ける仙人などが畫かれる。

圖38も圖3637と同じグループに屬する畫像石であるが、中央に長い頸を絡ませ、互ひに一方の前肢を上げて合せた、胴と足の長い四足獸が一對をり、周圍にも同種のもが群がつてゐる。圖39にも下邊に、頸は絡ませてゐないが、同様互ひに一方の前肢を上げて合せる、胴と頸の長い四足獸が一對ゐる。この方は頭の形が龍である。この形の頭を角をつけると黃龍(圖45)、蛟龍圖17上段といった普通の龍の頭になるが、この龍は角がない。『淮南子』覽冥訓「服駕應龍驂青虬」の高誘注に

有角爲龍、無角爲虬

と、即ち角のあるのが龍で、角のないのが虬だ、といふ虬に當てることが可能である。『淮南子』、要略訓に

今畫龍首、觀者不知其何獸也、具其形則不疑矣

と、即ち、いま龍の頭を畫いても、見てゐる者は何の獸かわからない。その身體がすっかり畫ければ誰も疑問をいだかない、といふのである。圖38の動物も、頭だけみると龍かどうかはつきりしないが、その異常に長い胴と頸をみれば、やはりどうしても龍の類である。同じく虬としておく。

圖38では中央の頸を絡ませて向ひ合ふ虬の左側の頸の左上方に小さい圓がある。天體と見られる。さうするとこの虬の群がゐる空間は宇宙のやうである。圖39でも、外框の上邊を除く三邊に沿つて小さく山が畫かれてゐる。これも天上の出來事である。以上の三圖を見るに、祥瑞の獸である麒麟が一對出現して、その周圍に虬が澤山群れてをり、鳳凰が複數で出現して他の鳥も集まり、睦ぶ。虬が一對で仲よくしてゐるとその周邊に澤山の虬が群集する、といふ形で、中心の瑞獸が麒麟でも鳳凰でも虬でもその型式は共通である。瑞獸は王者の徳が高く、また天下に洽くゆきわたるとその證據として出現するだけに止らず、その周圍に自然界、動植物界、および鬼神の世界の平和を隨伴して現れてくるのである。前引『說文』に鳳凰が飛ぶと澤山の鳥が群つて一緒に飛ぶといふのはその現象をいつたものである。また『淮南子』覽冥訓に

今夫赤鷺青虬之游冀州也、天清地定、毒獸不作、飛鳥不駭

と、また

鳳凰之翔、至德也、雷霆不作、風雨不興……

といふ。即ち、今それ赤螭と青虬が冀州に遊ぶと、天は清く澄み、地は安定して、害をなす動物は出て来ず、飛鳥が人を驚かしたりしない。と、また鳳凰が天がけるのは王の徳が高いしである。雷霆がおこらず、雨風がなく云々、といふのである。これも祥瑞の動物や鳥が現れるに當り、宇宙の現象の安定や地上の生物世界の平和を随伴してくることを言つたものである。これを畫にしたのが圖36—39である。圖38 39の光景が宇宙の空間に展開してゐるのも、このやうに解することができる。

圖40は徐州十里鋪の畫像石墓の後室横額である。ここにも祥瑞のテーマが展開されてゐる。圖の左半は、正面形に畫かれた鳳凰に向つて鳥が空をかけて群集する光景。左端の二匹の有翼の動物はこれに尻を向けながら振り返つて氣にしてゐる風である。中央より右寄りには圖38にもあつたやうな、頸の長い動物が頸を絡ませるテーマ。頸の後に鳳凰の長い冠羽のやうなものが翻へる。圖38 39とはまた違つた種類の動物のやうである。これに有翼の動物が寄つて來てゐるところは圖38 39と同じ狀況である。右端には龍頭長尾（尾の先は腹の下、前後肢の間にみえる）の鬼神で、圖27左の下方にゐたのと同じものらしい。こんな奴まで寄つて來た、といふのである。

圖41は徐州茅村の畫像石墓の第二室北壁の畫像。圖37と同様、中央に向ひ合ひ、頸を平行に上方にさしのべる鳳凰が表はされてゐる。その左をみると、人頭の四足獸をり、頸の兩側から八つの人首が枝になつて出てゐる。表はし方は違ふが、これは圖35下にも出て來た崑崙山にゐる開明獸である。するとここはやはり崑崙の世界であらうか。否である。すぐ左に象と駱駝がある。象は圖7 9 26上などで南方に配されてゐるが、駱駝と並ぶ所をみると、これはむしろ塞外民族が珍獸として獻した動物といふ色彩が強さうである。中央に畫かれ、この畫面の主役と知られる鳳凰の祥瑞が、天下太平を随伴して現れ、四夷が服し、象や駱駝を貢納した、といふコンテクストのやうである。さうすると開明獸も祥瑞の一つとして出現してゐる、と見た方がよささうである。

右半を見ると、鳳凰の類が翼をひろげ、その右に幹がよぢれ合つた樹木があり、枝葉を大きく擴げてゐる。木連理の類であ

る。その右は仙人と麒麟。勿論祥瑞である。右瑞は何の動物か不明。

かうしてみると、圖41は祥瑞の圖ではあるが、圖36—39の一群と比べると羅列的で、像と像の間の有機的つながりがなくなつてゐる。

圖42は睢寧九女墩の一群の中から採つたものであるが、これも圖41と同様、羅列的な類である。圖43の中央、下邊に畫かれた品物は圖47上の祥瑞圖に「神鼎、不炊自熟、五味自生」といふ不思議な鼎に違ひない。<sup>(128)</sup> 兩側に人立する小動物がゐて、兩側に寄つて來てうづくまる巨大な鹿角の鬼神に、この鼎について説明してゐるやうなしぐさをしてゐる。鹿角の鬼神はよいにほひをかぎつけてやつて來た、といふ所であらうか。畫の内容は以上で一まとまりである。鼎の上方には枝が交叉した珍しい形の木があり、兩側に鳳凰がゐて向ひ合ふ。これも一つの祥瑞圖である。鳳凰の左には九尾狐、右には龍がゐる。この畫は美しい線で畫かれた圖像がぎつしりつまつてゐるが、内容は右にみたごとく一つにまとまつてゐない。

なほ鼎の右、右側の鳳凰の足の前、龍の前などに圓渦紋を入れた小圓盤が間配られてゐる。恐らく天體を表はしたものと思はれる。この畫の展開するのが地上を絶した世界であることを示すものと考へられる。

圖42をみると、左に何か極めて珍しい形をした二種の植物が生え、その前に翼を持ち、肩から長い羽毛のやうなもの——西王母、東王公などによく見る——が出た神が片膝を立てて坐つてゐる。この神は仙人のやうに頭上に羽状のものが立ち、被髪である。これは何の光景か不明。その右に冥莢(圖47上を参照)の一種と思はれるものが生え、その右に「節」を片手に持つた仙人が反對の手で何か粒粒のものを受けてゐる。冥莢の下には猿と鳥のいがみ合ふ點景がそへられる。仙人の後は何かの靈草、その右には麒麟がをり、更に右には何かの動物の一部が残存してゐる。畫かれた對象に何かよくわからないものもあるが、この畫面が圖43と同様、何か一つのまとまつた内容の神話的光景を畫いたものでなく、祥瑞を羅列して畫らしい形にまとめたものであることはほぼ確かといへよう。

圖44は武氏祠畫像石の一つであるが、これも祥瑞の植物を列擧したといふ形で、圖42よりもさらに羅列的である。右端は冥

莢であるが、他は正確にアイデンティファイすることができない。夫々に仙人を伴ふが圖式的である。

以上この章の(1)―(3)節で扱った祥瑞のテーマはかういふことと知られる。即ち、これらは中國世界の果にゐる西王母、東王公のごとき生命力増益を實現する者や、鳳凰、龍といった自然界の安寧、調和をもたらす者の働きが順調であることを祝福して、そのもとに動物達が出現するのを畫いたものであるが、その祝福さるべきお目度い世界を畫像の形で墓前の祠堂や墓室中に出現させたのがここに扱つた類である、と。

#### (4) 武氏祠の屋根石

圖47は武梁の石祠の屋根を形造る板石の裏側、即ち室内から見える側に畫かれた祥瑞圖である。上下の圖の石は夫々第一石、第二石と呼ばれる。各三段に分けて圖が刻されてゐるが、第二石は祥瑞圖が第二段までしかなく、第三段は車馬行列の圖になつてゐる。各種の祥瑞の畫に、名稱とそれがどういふ時に出現する、といふ解説文をそへ、祥瑞圖鑑といった形をとる。説明的、教育的なものである點、同じ祥瑞を扱つたものでも前の三節に記したものと性質に相違がある。別に解説するまでもないやうなものであるが、石が缺けてわかりにくい圖も多いので簡単に解説しておく。

#### 第一石

##### 第一段、左より

○一本の莖に一五枚の葉が對生に附く植物

榜題「冥莢、堯時……」

漢代鬼神の世界

○細長い葉ないし枝が互生する何かの植物

榜題「……周時……」

○普通にみる姿の龍

榜題「不澗池如漁、則黃龍游於池」

○鳥の頭と翼の一部

榜題「……」

○鳥の足、肩、尾の先

榜題「……」

○有翼の馬

○馬(?)の胸前

○粟のやうな穂の澤山ついた植物

○莖の頂上に圓いもの、左右に鉢を伏せたやうな形ものが四つ附く植物

○麒麟

榜題「□、不剝胎殘少則至」

○蓋つきの鼎

榜題「神□、不炊自熟……」

○枝の擴がつた低い木

○大きな蓮華狀の花。仙人が一人これにつかまる。基部から葉ないし葉の

ついた莖が二本出てゐる。

榜題「……」

○深い石臼のやうな形のもの。縁に「節」をかついだ仙人が乗る。

榜題「狼井」

第二段

○何かの翼

榜題「……」

○圖不明

榜題「……」

○圖不明

榜題「……」

○細長い葉ないし枝が互生する何かの植物三本

榜題「……英……」

○蹄のついた動物の足

○動物の足

榜題「白□□□者、□則至」

○前足が四本ある馬のやうな動物

榜題「六足獸、謀及衆則至」

○角と蹄のある動物

○動物の足

榜題「……」

第三段

○細長い葉ないし枝のある植物

○何か犬のやうな動物

○小さい犬のやうな動物

○尾の細い動物

榜題「……者□□則至」

○圖不明

榜題「……」

○捻つた繩のやうな尾(?)

その左側の榜題「……」、右側の榜題「……不……」

○何か圓いもの

○大きな目をもつ大きな動物頭

榜題「……如事……」

○鳥の頸から尾まで

○動物の尻と尾の一部

○うづくまつた虎

榜題「……仁不□人」

第二石

第一段

○低いゑり狀の口縁のついた足つきの甕

榜題「銀甕、刑法得中……」



○二匹の魚が横腹でくつき合ったもの

榜題「比目魚、王□明無不銜則至」

○何の變哲もない魚

榜題「白魚、武……津入于王……」

○獸。足が五本残る。首は二つあるはずだが一つしか残らない。

榜題「比肩獸、王者德及縹寡則至」

○頸から上が二つに分れて頭が二つ附き、長い尾のある鳥

榜題「比翼鳥、王者德及高遠則至」

○斜格子紋を加へた圭

榜題「玄圭、水泉流通、四海會同則至」

○格子紋を加へた璧

榜題「璧流離、王者不隱過則至」

○根の方が二株になり、上方で幹が一つになつた木

榜題「木連理、王者德純洽、八方爲一家、則連理生」

○動物の尾と後足

榜題「赤髯、仁姦息□則至」

○横長の長方形のもの

榜題「玉英、五常□□則至」

○圖不明

榜題「……」

○羊のやうな角のある動物頸と頭の一部

榜題「玉馬、□者清明、尊賢……來」

○動物の尾のやうなもの

榜題「……旬……」

第二段

○畫像石で西王母が頭につけてゐるやうな勝

榜題「……王者……」

○立つた馬

榜題「澤馬、王者勞來……則……」

○一方の前肢を舉げて立つ馬

榜題「白馬朱鬣、……良則……」

○鹿に乗り、旗をかついだ仙人

榜題「渠□來……」

○鹿の頭と頸

榜題「……」

○動物の後肢の一部

榜題「皇帝時、南□乘鹿、來獻巨暢」

○何かの樹木。根方にひこ生えが出てゐる。傍に女性が立ち、片手を木の

方にのばす。

榜題「……生后稷」

○左側に片手をあげ、後をふり向く女性が立ち、その右にももう一人の人が立つ。

榜題「……帝……」

○圖不明

榜題「……」

○何かの植物

榜題「……盈王者清……」

武氏祠のグループに屬する祥瑞圖の畫像石はもう一枚ある。圖46に示したのがそれである。武梁祠のものと同様、帶狀のパネルに分割し、各々に畫像とその名稱、説明文を記した榜題がある。その圖柄と榜題をさきと同じ體裁で録しておく。

第一段

○一本足の鳥が後をふりかへる。この鳥の後には人間の手の、胴體をもち、人間の着物を着るが足が爪のある獸足になつた者が立つ。兩者の間に雲氣のやうなものが畫かれる。

榜題「有鳥如鶴、□□□□白喙、名□□、其鳴自□、□有動矣」

○人立する熊のやうな動物の前肢と後肢の先

○鳥の兩足

第二段

○魚が二匹脇腹でくつついた形。下に渦卷のついた雲氣がある。

榜題「比目魚、王者惠廣明、無不通則至矣」

○胴が一巻き丸まつた龍。胴に雲氣がつく。

○動物の頸と耳の一部、前肢と後肢の殘片

榜題「□□□王者惡及鰥寡□□」

○鳥の頭、翼、爪の一部

第三段

○右向に立ち、頸を左にふり向けた四足獸。長い尾が股の間から腹を廻り、肩の上方につづく。頸の上には鳥が舞ひ降りてくる。

榜題「有獸□、□身長尾、□□□□、名曰法□、□則銜其尾、□之則民殍矣」

○四翼の動物。二枚の翼の付け根と二枚の翼の先端がみえる。後足二本、胸と前肢の付け根、角(?)の先が残る。右側に雲氣がそへられてゐる。

榜題「有獸……如□□□吉壽□」

○自然藩の葉のやうな形の雲氣(?)

榜題「……者……」

○尾の先をさやに納めた馬の尾、尻、後肢の一部

榜題「……曰……」

小 結

以上、漢代の鬼神が集合して構成する何らかの光景を表はした圖像の資料を附圖に提示し、その解説を行つた。一通りの解説をするだけで随分の紙面を費したが、これは第一歩の作業であり、研究が進むに従つて、ここに記した考へも修正を要するものが多多發見されてくることは十分に豫測される所である。とはいへ、ここに扱つた類の圖像が從來、一體どういふ意圖をもつて、何を畫いたものであるかの基礎的な研究なしに、思ひつくままの名を冠して、或ひはまた群獸、怪禽などの漠然た

る名稱をもつて解説されて来たことを思へば、この基本資料の分類提示、解説の文も、一つの進歩に貢献するものであると信ずる。

注

(この研究は昭和四七年度文部省科學研究費「漢代文物の考古學的研究」によるものである)

- (1) 林一九六〇、四七—八。
- (2) 崔豹、『古今注』都邑第二「闕……其上皆丹雘、其下皆畫雲氣仙靈奇禽怪獸、以昭示四方焉」。
- (3) 例へば安志敏一九七三、五一。
- (4) シャヴァンス (Charvannes 1909) の畫像石の解説も鬼神に關する部分には極めて表面的であり、關野貞のもの (關野一九一六) も注(12)に一例を示したごとく、ひどくお座なりである。フィンスタープツェの漢畫像表現の索引 (Finsterhush 1966, 199-252) も鬼神の類で探られてゐる項目が他の部面の詳細なものと比して粗いなど、すべてこの方面の研究の未開状態を示すものである。
- (5) 曾昭燭等一九五六。
- (6) 同様な方角のとり方は鏡背紋にも例がある (林一九七三、四七頁)。
- (7) 林一九七三、一四—九。
- (8) 林一九七三、注(46)参照。
- (9) 清水嘉一 一九四四、一三八及一五五—六三。
- (10) 王海航一九六五。
- (11) 水野清一 一九五四。この論文に引用されてゐないが、孫作雲は早く一九四一年に全く同じアイデンティフィケーションを發表してゐる (孫作雲一九四一、下、五七)。
- なほ天帝使者については、他に高郵邵家溝の漢代遺蹟から道教の木製符籙などと一緒に發掘された「天帝使者」の封泥がある (江蘇省文物管理委員會一九六〇、二〇、四四)。呪術的目的をもつたものの封印に使はれたものと考へられるが、今の問題とは直接關係がなからう。
- (12) 郭沫若一九五四、七七—八。
- (13) 「某告某官敢告移某官……」「傳到」「急急如律令」などの語がそれである。
- (14) 本文は次のごとくである。
- 熹平二年十二月乙巳朔、十六日庚申、天帝使者告張氏之家三丘五墓、墓左墓右、中央墓主、塚丞塚令、主塚司令、魂門亭長、塚中遊擊等、敢告移丘丞塚樞、地下二千石、東塚侯、西塚伯、地下擊植卿、耗里伍長等、今日吉良、非用他故、但以死人張叔敬、薄命蚤死、當來下歸丘墓、黃神生五嶽、主死人錄、召魂召魄、主死人籍、生人築高臺、死人歸、深自纏、眉須(鬢)以(已)落、下爲土灰、今故上復除之藥、欲令後世無有死者、上黨人參九枚、欲以代生人、鉛人、持代死人、黃豆瓜子、死人持給地下賦、立制牡厲、辟除土咎、欲令禍殃不行、傳到約勅地吏、勿復煩擾張氏之家、急急如律令
- と。内容は次のごとくである。即ち、
- 熹平二年十二月乙巳朔、十六日庚申の日、天帝使者は張氏の家の三丘五墓に屬する墓の役人達——假空の役人——墓左、墓右、中央墓主、塚丞塚令、主塚司令、魂門亭長、塚中遊擊等に命令を下し、丘丞墓伯、地下二千石、東塚侯、西塚伯、地下擊植卿、耗里伍長等に次のやうな命令を傳達せしめる。即ち、「今日は吉良な日であるが、他でもない、このやうなことだ。つまり、死者の張叔敬は、薄命にして早死にし、丘墓に下りて來ることになつてゐる。黃神(黃帝の神)は五嶽を生んだが、彼等は死人のリストを保管してをり、召魂召魄は死人の名稱を司つてゐる。生人たちは高い塚を築き、死人は

ここにやつて来て、深い所に自らを埋めることになるが、肩や鬚は既に落ちてしまつてをり、いづれは地中の土灰になる。いまわざわざがれをとり除く薬を（この文章を書き記した容器に入れて）獻上し、後世死者がないやうにしたい。上黨の人參九本はそれでもつて生人の代用とし、鉛人は死人の代用にする。黃豆と瓜子は、それでもつて地下の賦にあてるものだ。牡蠣（？）をたちどころに制御し、土の咎をとり除き、禍殃が起らないやうにして欲しい。この文書が到着したら約束して丘丞墓伯、地下二千石等の役人に勅し、ふたたび張氏の家をわづらはすことがないやう。直ちに命令通り實行せよ。

同様な意圖の呪術的な文章は他にも例がある。

永壽二年二月己未朔、廿七日乙酉、天帝使者告丘丞墓伯、地下二千石、今成氏之家死者字桃……〔書道全集〕（舊版）三、一三）といふのは、天帝使者が直接丘丞墓伯、地下二千石に命令を下す點に相違がある。また少し違つたもので、

建和元年十一月丁未朔十四日解、天帝使者謹爲加氏之家、別解地下后、死婦加亡方年二十四……〔陝西省文物管理委員會一九五八、六一二）

といふのである。省略した部分に意味のとりにくい部分があるが、引用したところは

建和元年十一月丁未朔、一四日に解す（おはらひの儀式をする）。天帝使者は謹んで加氏の家のために、別に地下后に解す。死者たる婦人の加氏のなくなつたのは二十四歳で云々

といふのである。天帝使者が死人の出た加氏の遺族のために地下の世界を支配する諸侯に辯解じみた説明をする、といふ趣旨は共通である。

なほ、最初に引いた例に黃帝の子孫である五嶽が死者のリストを保管する、といひ、また死體は墓中で間もなく腐つて土灰になつてしまふ、と記される。また趙襄が「泰山治鬼」〔陔餘叢考〕三三五）

に證したごとく、漢代から死者の靈魂が泰山に行くと思はれ、羅振玉の『丙寅稿』所録の劉伯平鎮墓券にも「生屬長安、死屬大山」とあつて、これが同時代資料によつて裏づけられるが、一方立派な墓を作り、死者の死後の生活のための明器を副葬する風は漢末まで盛んであり、漢代の死後の世界についての觀念は更に研究が必要である。

(15) 四神を省いて多種類の武器を持つた天帝使者の像だけを表はした帶鉤もある(Karlgren 1934, Pl. XLVII, 2 梅原一九三五、雜器、74)。

(16) 引用の各群の中には、例へば鳥頭をもつた四足獸が後室過梁と中室八角柱に見出されるが、前者には冠羽のあるものとなないものが同じ東面に、また後者に孔雀の尾羽根のやうな冠羽を持つものと同じがあるが、頭に長羽を持つものが夫々北および西面に出てくるごとき例には拾つてない。また一足の鳥が同じく後室過梁と中室八角柱に現れるが、尾羽根の有無に相違があり、これも拾つてない。

(17) なほ今引いた圖27右の風神のすぐ下に顧首の天馬が表はされてゐる。この表現は表一の六番目に引いた動物と非常によく似てゐる。然し前者が馬の蹄を持つに對し、後者は偶蹄で、兩者を同一物とすることはできない。

(18) 郝懿行の箋疏に記すごとく、「天柱」は天柱の誤り。

(19) 周穆王云、咸陽去此四十六萬里、山高平地三萬六千里、上三角、方廣萬里、形似偃盆、下狹上廣、故名曰崑崙山。

(20) 『山海經』西山經に「西王母、其狀如人、豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝」と。また大荒西經に「有人戴勝虎齒、有豹尾穴處、名曰西王母」

(21) 梅原末治一九三九、圖版六。

(22) 被髮が死んだ人間の魂、鬼の特徴であることはさきにくはしく論じた(林一九六〇、二七一九)。

(23) 「里」の扁に「斗」の旁の字。搗といふやうな意味の字と思はれる。

- (24) Chavannes 1909, no. 156. 關野一九一六、一八八圖、孫文青一九三六、六八圖等。
- (25) 例へば聞一多一九五六、姜嫄履大人跡考。
- (26) 聞一多一九五六、高唐神女傳說之分析、第六節。
- (27) 杜而未一九五九、八一—四他。
- (28) 傅惜華一九五〇、九四、九五。
- (29) 林已奈夫一九七三、五六。
- (30) 林已奈夫一九六三、一〇三—四。『論衡』指瑞篇に「儒者説云、熊觥(麋)者、一角之羊也、性知有罪」といふのも同じものである。
- (31) 甘肅省文物管理委員會一九五九、七五。
- (32) 陝西省博物館、陝西省文管會一九五八、圖四、五、二九、三〇等。
- (33) 傅惜華一九五一、二〇。
- (34) 曾昭燁等一九五六、拓片六六。
- (35) 林已奈夫一九七一、一五。
- (36) なお辟邪、天祿(鹿)については『漢書』西域傳「……而有桃拔師子犀牛」の注に  
孟康曰、桃拔、一名符拔、似鹿長尾、一角者或爲天祿、者兩角(王先謙『補注』「者兩角、官本作兩角者、是」)或爲辟邪といふ。鹿に似て長尾、一角なのが天鹿、二角のものが辟邪だといふ説であるが、今引いた圖像や銘とは全く合はない別説である。
- (37) 凡南次二經之首、自拒山至于漆吳之山……其神皆龍身而鳥首。
- (38) 類似的記載についてはこの條の注、郝氏箋疏 Chavannes 1909, p. 253, n. 1 参照。
- (39) 西方有比肩獸焉、與邛邛峴虛比、爲邛邛峴虛齧甘草、卽有難、邛邛峴虛負而走、其名謂之蠻(郭璞注、呂氏春秋曰、北方有獸、其名爲蠻、鼠前而兔後、趨則頓、走則顛、然則邛邛峴虛亦宜鼠後而兔前、前高不得取甘草、故須蠻食之)。
- (40) なお郝懿行は箋疏にこれを西山經に記される蠻蠻だといふが、これは誤りであらう。蠻蠻は「其狀如鳧、而一翼一目、相得乃飛、名曰

- 蠻蠻」といふ。一羽の鳥を魚の開きのやうにした形のものであり、合せて一人前になるといふものである點、今問題の鳥と相違があるからである。
- (41) 沂南畫像石墓の報告書には(曾昭燁等一九五六、四二—六)以上に記したほかに、文獻に對應する圖像を幾つか拾ひ出してゐる。ここに採用してないものはそのアイデンティフィケーションが従ひがたいものである。繁雜をいとひ、それら一一について採用しなかつた根據を説明しない。
- (42) 沂南畫像石墓前室南壁上横額に畫かれた樹木(曾昭燁等一九五六、拓片第七幅)に畫かれた樹木の表現と比べると、この山上に立つものが樹木であることが知られよう。
- (43) 陝西省博物館、陝西省文管會一九五八、圖版五五、五六。
- (44) 曾昭燁等一九五六、拓片四一幅、四二幅。
- (45) 「裙、下裳也、裙、羣也、联接羣幅也」「緣裙、裙施緣也」。
- (46) 男、關野一九一六、圖一四三、孝堂山下畫像石、女、S. 1749, fig. 18. クム・ダリア支流、六號地A墓。
- (47) 呂思勉一九二八、三六一。
- (48) 林已奈夫一九六三、一一五一—六。
- (49) 同右、一〇—一三。
- (50) 『楚辭』九歎、遠遊「就顛頊而瞰詞兮、考玄冥於九桑」注「玄冥、太陰之祠、主刑殺也」。
- (51) 『風俗通義』八、雨師「春秋左氏傳說、共工之子爲玄冥師、鄭大夫子產譏於玄冥、雨師也」  
『春秋左氏傳』昭公三年「子產曰……昔金天氏有裔子曰昧、爲玄冥師……」注「玄冥水官、昧爲水官之長」。
- (52) 『漢書』百官公卿表「自顛頊自來爲民師、而命呂民事、有重黎、句芒、祝融、后土、蓐收、玄冥之官、然已上也」注「應劭曰……皆封爲上公、祀爲貴神……」。
- 林已奈夫一九七三、圖33、34、43。

- (53) 『淮南子』墜形訓に中國世界の果に八紘があり、その外に八極があるといふ記述があり、八極といふのは八方にある山である。即ち八紘之外乃有八極、自東北方曰方土之山、曰蒼門、東方曰東極之山、曰開明之門、東南方曰彼母之山、曰陽門……とあるものである。
- (54) 林巳奈夫一九七三、三八一五七。
- (55) 扶木在陽州、日之所曠、建木在都廣、衆帝所自上下、日中無景、呼而無響、蓋天地之中也、若木在建木西、末有十日、其華照下地。
- (56) 帝以甲乙殺青龍於東方、以丙丁殺赤龍於南方、以庚辛殺白龍於西方、以壬癸殺黑龍於北方。
- (57) 林巳奈夫一九六一—二、(四)七—一四。
- (58) 例へば Chavannes 1909, no. 162.
- (59) 『山海經』海內北經「西王母……有三青鳥、爲西王母取食」郭注「又有三足鳥、主給仕」と。この條に郝懿行は注して「史記正義引輿地圖云、有三足神鳥、爲王母取食」といふ。
- (60) 懿行案、鶉鳥鳳也、海內西經云、昆侖開明西北、皆有鳳凰是也、埤雅引師曠禽經曰、赤鳳謂之鶉、然則南方朱鳥七宿曰鶉首、鶉火、鶉尾亦是也。
- (61) Chavannes 1909, t. I. p. 80.
- (62) 同右, p. 79.
- (63) 『淮南子』墜形訓には前引のやうに南方域外の國として裸國が擧げられ、原道訓の記述(故禹之裸國、解衣而入、衣帶而出、因之也)によると文字通り裸で暮す國と知られる。この圖像も或ひは裸國の人かと考へられるが、同様なりの人間は反對側の破風内壁にもある。むしろ伏羲女媧の世界に屬する者とみた方がよいかも知れない。
- (64) Chavannes 1909, t. I. p. 84.
- (65) 雷公については後述二五八—二六三頁参照。
- (66) 敬天之怒。
- (67) 『周禮』大宗伯「以禋燎祀司中司合軛師雨師」の鄭司農注に「風師、箕也」と。また『風俗通義』祀典篇に「風師者箕星也、箕主簸揚、能致風氣」と。また『獨斷』上に「風伯神、箕星也、其象在天、能與風」と。
- (68) Chavannes 1909, t. I. pp. 209-10.
- (69) この志に記される所が世の中に實際にその通り行はれたといふことはないが、大體の目安としては通用するものであることは、さきに筆者が畫像石の車馬行列の研究において明かにした通りである(林一九六六、二一五—一六)。
- (70) 梅原末治一九三九、圖版八一—二。
- (71) よく似た圖柄は M. A. フィッシャーが山東からドイツに持ちかへつた畫像石にも見出され (Chavannes 1909, no. 171)。このやうな圖柄が陝北特有のものではなかつたことが知られる。
- (72) 『文選』班固、幽通賦「黃神逸而靡質兮」注に「應劭曰、黃、黃帝也」と。これも高誘と同説である。「黃帝の神」といふのは、昔地上にゐた生身の人間であつた黃帝の「神」となつたもの、といふこととへら考れる。『左傳』昭公七年に「昔堯殛鯀于羽山、其神化爲黃熊、入于羽淵」といふ傳説にも生きた人間が「神」になるといふ考へが裏にうかがはれる。かういふ場合の「神」とはどういふ觀念であるかについては多くの用例による歸納的な研究を必要としようが、今ここには立ち入る餘裕がない。なほ同僚の小南一郎氏は次に引く『洞冥記』には西王母の夫である東王公が「黃翁」と呼ばれてゐる所から、淮南子の西老と對になつて出てくる黃神も東王公と解しうる、といふ説である。
- (73) (東方) 朔以元封中遊濛鴻之澤、忽見王母采桑於白海之濱、俄有黃翁指阿母以告朔曰、昔爲吾妻、託形爲太白之精、今汝此星精也。
- (74) Fairbank 1941, pp. 81-2.
- (75) 同右, fig. 10.
- (76) この所に高誘は注して  
扶、攀也、搖、動也、扞抱、引辰也、扶搖、直如羊角、轉如曲檠

行而上也

と、即ち扶とは攀の意味、揺とは動のこと。珍抱とは引き戻すこと。扶揺の運動は直なること羊角のやうであり、轉ずること物を巻くつる草のごとく、すすみ上る、といふのである。

この所には本文にも注にも誤りがある。劉文典の集解に本文は「珍扶揺、抱羊角而上」とすべしとの俞樾の説を引く。扶揺は『莊子』逍遙遊「搏扶揺而上者九萬里」とある扶揺で、下から上に吹き上る風、つむじ風のことである。するとたしかに扶揺の上には字が必要である。高注は扶揺を動詞に解釋してゐる點誤りと思はれる。

「直如羊角」といふ解釋も意味をなさない。羊角は螺旋形に曲つてゐるからである。俞樾は本文の珍を扶揺の上に持つてゆくが、氏もいふごとく、『淮南子』中には例へば本經訓に「菱杼珍抱」と珍抱の語があり、高注に「珍、戻也、抱、轉也」とあつて、先原道訓の「珍抱」はこの「珍抱」と同じ熟語としてよいのではないかと思はれる。

(76) Chavannes 1909, p. 212.

(77) 『史記』天官書「輔星」の集解に「孟康曰、在北斗第六星旁」と。

(78) 清水嘉一 一九四四、一四二頁參照。

(79) 夏鼐一九六五、八一。

『淮南子』本經訓「帝者體太一」とあり、その高誘注に「體、法也太一、天之刑神」といふ。この畫像は後漢時代に高誘のいふごとく帝が刑神である太一の性格をもつたことの裏付けと考へることも可能である。ただしこの高誘注は『淮南子』のこの太一の注釋として不適切である。この場合太一はさういつた人格的な神でなく、哲學的實體でなければならぬ。

(80) 注(20)。

(81) 圖18、19の畫像石は武氏後石室第四、第五石であるが、兩者スタイルが共通することから一群とみられ、圖15―17の武氏後石室第一―三石の一群と區別されることはフェアバンクの指摘してゐる通りで

漢代鬼神の世界

め (Fairbank 1941, p. 81, n. 63)。

(82) 本文の「推椎」の椎を黃暉は『論衡校釋』に衍字だといふが、畫像石の雷公は椎を持つ。衍字ではない。

(83) 黃暉は注(82)引の書に、「相扣擊之意」の「意」を「音」の誤りとする、是である。

(84) 黃暉は注(82)引の書に本文の「椎所擊」を「所推擊」になほすが、雷公が椎を持つことを知れば原文のままてよいことが知られる。

(85) 『說文』に「磬、備火長頸瓶也」といふ磬である。

(86) 千省吾一九四〇、一六一―一九、釋虹。

(87) 注(85)に引いたごとく磬が火に備へる長頸の瓶といはれ、また『淮南子』兵略訓に「章華文臺燒……舉壺益益而灌之、其滅可立而待也」といふごとくである。

(88) 黃暉は『論衡校釋』に本文の「校」は「絞」でねぢり合せること、「軫」は「轉」とする。

(89) 黃暉は前引書で「刻尊爲雷之形」だけを禮の引用として括弧に入れるが、筆者のごとく引用はこゝまでとしないと「校軫」についての後の説明が重複することになつてしまふ。

(90) 小林太市郎一九四七、一一九―二〇。

(91) 離で逐はれる鬼神については注(90)所引書二三七―七九に詳論されてゐる。他に水野がこれを蚩尤戯と見た説が誤りであることは先に二二七頁に記した通りである。

(92) 林巴奈夫一九六六、二〇九。

(93) 同右、二〇三。

(94) 本文の「帝之囿時」を郭璞が「天帝苑圃之時節」と釋したのに對し、郝懿行は『箋疏』に「囿時之時、疑讀爲時」といふのに従ふ。

(95) 林巴奈夫一九六六、一八九。

(96) 龍の種類については二七二―二七四頁參照。

(97) 例へば林巴奈夫一九六六、附圖5、12、13、15等。

(98) すると武氏後石室第二石と第三石も別の石室に屬する畫像石といふ

ことになる。

(99) 二七二頁参照。

(100) 『淮南子』原道訓。

(101) 孫作雲一九四七、三五。

(102) 林巳奈夫一九六六、圖30—33。

(103) 長廣敏雄一九六五、六三。

(104) 二皇は『淮南子』原道訓「秦古二皇得道之柄、立於中央」の高誘注に「二皇、伏羲、神農也」といふが、この二皇は「人首蛇形」といふ所からみて伏羲女媧のことではなければならない。

(105) 足が二本向ふ側で尻は虎の腰の上であり、腰の刀は虎の胸の手に垂れる。

(106) 畫像石の鬼神の出て来る光景を、そのやうなものを主題とした藝能を畫いたものとする解釋が行はれるが(例へば本論文の圖26を江蘇省文物管理委員會一九五九、一〇頁に樂舞百戲と解説することし)、百戲といつた類を畫いた場合は、例へば沂南畫像石三四幅右方で鳳凰の體の下に、中に入つた人の足がつき出るとか、その前に立つ神に扮した男の持つ植物がいかにも小道具然と節のある竹に枝がくくりつけられてゐるとか、それが藝能であることが察せられる形に畫かれてゐる。さうでないものは神話的光景を題にした藝能の畫ではなく、神話的光景を題にした畫と見るべきである。今の力士の出て来る光景も、これがさういつた芝居を描寫したものと見るべき所がないから、これは虎のぬひぐるみや作り物の怪物と見ることはできない。

(107) 楊寬一九三八、三六五—七二。

(108) 『楚辭』離騷「澆身被服強圍兮」注「強圍、多力也」。

(109) 『集解』徐廣曰、今武都故道有怒特祠、圖大牛上生樹、本有牛從木中出、後見於豐水中、『正義』……『錄異傳』云、秦文公時、雍南山有大梓樹、文公伐之、輒有大風雨、樹生合不斷、時有一人病、夜往山中、聞有鬼語樹神曰、秦若使人被髮、以朱絲纒樹伐汝、汝得不

困耶、樹神無言、明日病人語聞、公如其言伐樹、斷中有一青牛、走入豐水中、其後牛出豐水中、使騎擊之、不勝、有騎墮地、復上、髮解、牛畏之、入不出……。

(110) 瀧川龜太郎が『史記』秦本記の前引の條につき大梓、豊、大特は蓋し戎名ならんといふのはこれからみても大間違ひである。

(111) 『史記』五帝本紀、堯の條。

(112) 長廣敏雄一九六五、六六。

(113) 同右、六四—五。

(114) 圖24—26は同じ地區から收集され、同じ技法で表はされ、同一の建造物に屬してゐたものと想像されるが、破風形の石がある所から、やはり地上の祠堂のものではないかと考へられる。

(115) 長廣敏雄一九六五、六四。

(116) 波形のあり飾りは沂南畫像石墓でいへば、圖5の祝融、玄冥の像にある。また破は圖31、32の西王母、東王公の像に見られる。

(117) 林巳奈夫一九七三、一九—二三。

(118) Fairbank 1941, pp. 43—86, 秋山進午一九六三。

(119) Fairbank 1941, fig. 6.

(120) 『釋名』釋衣服「帔、披也、披之肩背、不及下也」といふもの。

(121) 次の西王母像にも出てくるこの團子を石索は三珠樹に當て、シャヴアンヌも踏襲してゐる。三珠樹は『山海經』海外南經に「三珠樹在厭火北赤水上、其爲樹如柏、葉皆爲珠、一曰、其爲樹若華」とある。柏(このでがしは)のやうな木で葉が珠(眞珠)のやうだといふのだが、葉であれば圖にみるやうに團子の串刺しの形になつてゐてはおかしい。これが串刺しの團子であることは、例へば孝堂山石室西壁畫像(關野貞一九一六、一三圖)右下、戰爭の場面の下方で方形の爐を挟んで二人が對ひ合つてこれと同じものを焼いてゐることから明かである。なほ三珠樹については孫作雲が(孫一九四七、三七)鏡背紋で仙人が朱雀にさし出す三叉の枝の先に靈芝のやうなものが附いたものをこれに當ててゐる。この方が可能性がある。



(122) 林巳奈夫一九七三、圖21ほか。劉志遠一九五八、圖六七ほか。

(123) なほこの圖に出てくる鬼神の圖像について『石索』に意見が述べられ、關野貞は(關野一九一六、本文五〇—一頁)これを引いて「當れりといふべし」といふ。實際は當つてゐないので次に引いて批判を加へておく。双仙人頭有翼蛇尾の鬼神につき、『山海經』海外東經に「垂重在其北、各有兩首」といふ垂重、大荒南經に「南海之外赤水之西……有三青獸相并、名曰雙雙」といふ雙雙を引く。垂重が圖17第二段に見るごとき胸がアーチ形をなす双頭龍で表はされた虹であることはいふまでもない。また雙雙についてはどこにも人頭とは記されてゐない。『石索』はまた人面鳥身の神として(この圖32上には出てこないが、同類の圖像、圖31下、33などにはある)。大荒東經の「東海之渚中有神、人面鳥身、珥兩黃蛇、踐兩黃蛇、名曰禺虺」、中山經の「凡濟山經之首、自燁諸之山至夢渠之山……其神人面而鳥身」といふのを引くが、前者は身體の特徴が合はず、後者は規定が大まかすぎて合ふとも合はないとも決し難い。『石索』は畫像中の、東王公に碗のやうなものを差出す仙人について海内北經に「蛇巫之山、上有人操杯、而東向立、一日龜山、西王母梯几、而戴勝杖、其南有三青鳥、爲王母取食」とあるのを引く。圖31上などで西王母にコップをさし出すのが蛇巫山で杯をとるといはれる者である可能性もあるが、圖像では人でなく仙人である。圖32上は東王公であるからこの引例は不都合である。また『石索』は恐らく東王公の榻を龍が承けてゐるのを指すと思はれるが、大荒西經の「西南海之外、赤水之南、流沙之西、有人珥兩青蛇、乘兩龍、名曰夏后開」といふのを引く。龍の上に乗る開は兩蛇を耳飾りにしてゐなければならぬと、全く圖像と合はない。以上のやうな『石索』の意見を引いて「當れりと謂ふべし」とは。

(124) 『文選』羽獵賦「追出天寶出一方」注に「晋灼曰、天寶、雞頭而人身」と。

(125) 關野貞一九一六、圖一四五、一八七等。

(126) 『論衡』儒增篇に「世俗傳言、周鼎不爨自沸、不投物、物自出」と、周鼎と呼んでゐる。

(127) 榜題は容庚一九三六に概してよい拓が見られる。關野貞一九一六、圖五六、五七にも時に採るべき明瞭な文字が見出される。

(128) 容庚一九三六の讀みによる。かかげられた拓本二三ではこの字は讀みとれない。

附圖出所目錄

- 圖1 曾昭燁等一九五六、圖版三二—四。
- 圖2 同右、圖版二五—七。
- 圖3 同右、圖版二九。
- 圖4 同右、圖版三八、三九。
- 圖5 同右、圖版六五—八。
- 圖6 同右、圖版六一、六二。
- 圖7 ポストン美術館寫眞。
- 圖8 京都大學人文科學研究所考古資料寫眞。
- 圖9 フリア美術館寫眞。
- 圖10 江蘇省文物管理委員會一九五九、圖六、二。
- 圖11 山東省博物館一九六四、圖一〇。
- 圖12 京都大學人文科學研究所考古資料拓本。
- 圖13 Chavannes 1909, Pl. 27, no. 46, 47; Pl. 29, no. 52.
- 圖14 傅惜華一九五〇—一一、圖八一。
- 圖15 Chavannes 1909, Pl. 66, no. 130.
- 圖16 *ibid.* Pl. 67, no. 131.
- 圖17 *ibid.* Pl. 68, no. 132.
- 圖18 *ibid.* Pl. 69, no. 133.
- 圖19 *ibid.* Pl. 70, no. 134.
- 圖20 關野貞一九一六、一〇〇圖。

- 圖21 陝西省博物館等一九五八、圖版二〇。
- 圖22 山東省博物館一九六四、圖八。
- 圖23 京都大學人文科學研究所考古資料寫真(早稻田大學圖書館藏拓本)。
- 圖24 江蘇省文物管理委員會一九五九、圖五六。
- 圖25 同右、圖五七。
- 圖26 同右、圖五二、五三。
- 圖27 同右、圖三〇、三一。
- 圖28 京都大學人文科學研究所考古資料拓本。
- 圖29 京都大學人文科學研究所考古資料寫真。
- 圖30 京都大學人文科學研究所考古資料拓本。
- 圖31 Chavannes 1909, Pl. 44, 45, no. 75, 67.
- 圖32 關野貞一九一六、五九圖、六一圖。
- 圖33 Chavannes 1909, Pl. 53, no. 110.
- 圖34 *ibid.* Pl. 74, no. 141.
- 圖35 江蘇省文物管理委員會等一九六六、圖六、一、圖八、一。
- 圖36 江蘇省文物管理委員會一九五九、圖九四。
- 圖37 同右、圖九三。
- 圖38 同右、圖九一。
- 圖39 同右、圖五。
- 圖40 江蘇省文物管理委員會等一九六四、圖八、二。
- 圖41 江蘇省文物管理委員會一九五九、圖六。
- 圖42 同右、圖二九。
- 圖43 同右、圖二七。
- 圖44 關野貞一九一六、七〇圖。
- 圖45 Chavannes 1909, Pl. 89, no. 167.
- 圖46 *ibid.* Pl. 47, no. 80.
- 圖47 關野貞一九一六、五六圖、五七圖、京都大學人文科學研究所考古資料寫真(東京藝術大學藏拓本)。

插圖出所目錄

- 插圖1 右、王海航一九六五、圖3右。  
左、劉體智一九三五、一三、三三。
- 插圖2 京都大學人文科學研究所考古資料寫真。
- 插圖3 同右。
- 插圖4 同右(京都國立博物館藏拓本)。
- 插圖5 郭寶鈞一九五九、圖二九。
- 插圖6 (1) 京都大學人文科學研究所考古資料寫真。  
(2) 同右。  
(3) 同右。  
(4) 王振鐸一九三五、上、一。  
(5) 京都大學人文科學研究所考古資料寫真。

引用文獻目錄

- 日本、中國(著者名五〇音順)
- 秋山進午 一九六三、武梁祠堂復元の再檢討、『史林』四六、六、一〇五—一四。
- 安志敏 一九七三、長沙新發現的西漢帛書試探、『考古』一九七三、一、四三—五三。
- 于省吾 一九四〇、『雙劍謄股契駢枝』、北京。
- 梅原未治 一九三五、『歐米蒐儲支那古銅精華』、雜器、一、京都。
- 同 一九三九、『紹興古鏡聚英』、京都。
- 王海航 一九六五、石家莊市東崗頭村發現漢墓、『考古』一九六五、一、二、六五—一六。
- 王振鐸 一九三五、『漢代壺甄集錄』、北京。
- 夏鼎 一九六五、洛陽西漢壁畫墓中的星象圖『考古』一九六五、二、八〇—九〇。

郭 寶鈞 一九五九、『山彪鎮與琉璃閣』，北京。  
 郭 沫若 一九五四、『奴隸制時代』，北京。  
 甘肅省文物管理委員會 一九五九，酒泉下河清第一號和第一八號墓發掘簡報、『文物』一九五九，一〇、七一—七六。  
 江蘇省文物管理委員會 一九五九、『江蘇徐州漢畫像石』，北京。  
 同 一九六〇，江蘇高郵邵家溝漢代遺址的清理、『考古』一九六〇，一〇、一八一—三三及四四。  
 江蘇省文物管理委員會、南京博物院 一九六六，江蘇徐州十里鋪漢畫像石墓、『考古』一九六六，二、六六—八三、九一。  
 小林太市郎 一九四七、『漢唐古俗と明器泥像』，京都。  
 山東省博物館 一九六四，山東安邱漢畫像石墓發掘簡報、『文物』一九六四，四、三〇—四〇。  
 清水嘉一 一九四四，史記天官書恒星考、『東方學報』京都一四、三、一三七—一五六。  
 『書道全集』（舊版） 三、一九三—一、東京。  
 關 野貞 一九一六、『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』，東京。  
 陝西省文物管理委員會 一九五八，長安縣三里村東漢墓發掘簡報、『文物參考資料』一九五八，七、六一—一五。  
 陝西省博物館、陝西省文管會 一九五八、『陝北東漢畫象石刻選集』，北京。  
 曾昭燁、蔣寶庚、黎忠義 一九五六、『沂南古畫像石墓發掘報告』，北京。  
 孫 作雲 一九四一，崑尤考上、中、下，中國古代蛇氏族之研究——夏史新探、『中和月刊』二、四、二七一—五〇、五、三六一—五七。  
 同 一九四七，說羽人、『國立瀋陽博物院籌備委員會彙報』，一、二九—七五。  
 孫 文青 一九三六、『南陽漢畫象彙存』，南京。  
 杜 而未 一九五九、『中國古代宗教研究，天道上帝之部』，臺北。  
 長廣敏雄 一九六五、『漢代畫像の研究』，東京。  
 林巴奈夫 一九六〇，殷周時代の遺物に表わされた鬼神、『考古學雜誌』

漢代鬼神の世界

四六、二、一〇五—一三二。  
 同 一九六一—二、戰國時代の畫像紋、(一) (二)、『考古學雜誌』四七、三、二七—四九、四七、四、二〇—四八、四八、一、一一—二二。  
 同 一九六三，漢代男子のかぶりもの、『史林』四六、五、八〇—一二六。  
 同 一九六六，後漢時代の車馬行列、『東方學報』京都三七、一八三—二二六。  
 同 一九七一，長沙出土楚帛書の十二神の由來、『東方學報』京都四二、一—六三。  
 同 一九七三，漢鏡の圖柄二、三について、『東方學報』京都四四、一—六五。  
 傅 惜華 一九五〇—一、『漢代畫像全集』，初、二、北京。  
 聞 一多 一九五六、『神話與詩』，北京。  
 水野清一 一九五四，漢の崑尤伎について、『京都大學人文科學研究所創立廿五周年記念論文集』，一六一—一七七。  
 楊 寬 一九三八，中國上古史導論、『古史辨』，七、上。  
 容 庚 一九三六、『漢武梁祠畫像錄』，北京。  
 劉 志遠 一九五八、『四川漢代畫像傳藝術』，北京。  
 劉 體智 一九三五、『小校經閣金文拓本』。  
 呂 思勉 一九二八，三皇五帝考、『古史辨』，七、中、三三七—三八〇。  
 歐 文  
 Chavannes, Edouard, 1909: *Mission Archéologique dans la Chine Septentrionale*, Paris  
 Fairbank, Wilma, 1941, *The Offering Shrines of "Wu Liang Tzu," Adventures in Retrieval*, 41-86, Harvard.  
 Finsterbusch, Käthe, 1966, 1971: *Verzeichnis und Notizen der Han-*

*Darstellungen*, Wiesbaden.  
Karlgen, Bernhart, 1934, The Exhibition of Early Chinese Bronzes,  
*Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 6,  
86-136.

Sylwan, Vivi, 1949: *Investigations of Silk from Edsen-gol and Lop-nor  
and a Survey of Wool and Vegetable Materials, The Sino-  
Swedish Expedition Publication 32*, Stockholm.